

大菅遺跡・小菅大聖院跡 I

— OOSUGE SITE ・ KOSUGEDAISHOUIN SITE —

— 平成13年度 確認調査報告書 —

2002・3

長野県飯山市教育委員会

学校法人 文化学園

修験の里小菅史跡調査研究委員会

例 言

- 1 本書は、平成13(2001)年に実施した長野県飯山市瑞穂に所在する大菅遺跡及び小菅大聖院跡の確認調査報告書である。
- 2 大菅遺跡の確認調査は、平成13年10月1日より同年11月2日まで飯山市教育委員会が、学校法人文化学園(大沼淳理事長)の協力を得て実施した。
- 3 小菅大聖院跡の確認調査は、飯山市(担当 総務部企画財政課広報・地域振興係)が飯山版NPO団体に呼びかけて組織した「修験の里小菅史跡調査研究委員会」が、飯山市教育委員会の指導を得て平成13年11月6日より同11月19日まで実施した。
- 4 各調査体制は以下のとおりである。

大 菅 遺 跡

顧 問	小山 邦武	飯山市長
	大沼 淳	学校法人文化学園理事長
	真島 勝秀	小菅区長
調査顧問	田村 誠	学校法人文化学園総務本部長
調査指導	岡村 道雄	文化庁主任文化財調査官
	中野 政樹	文化女子大学教授
	笹本 正治	信州大学教授
	高橋 桂	飯山市文化財保護審議会長
	長瀬 哲	飯山市文化財保護審議委員
	樋口 和雄	長野県立歴史館文献資料課長
会議オブザーバー	蒲原 良典	小菅神社氏子総代会長
幹 事	渡辺 和夫	学校法人文化北竜湖山荘支配人
調査団長	高橋 桂	飯山市文化財保護審議会長
調査担当	望月 静雄	飯山市教育委員会事務局
事務局	清水 長雄	飯山市教育長
	市川 和夫	飯山市教育次長
	米持 五郎	市教育委員会生涯学習課長
	丸山 一男	市教育委員会生涯学習課長補佐兼社会教育係長
	望月 静雄	市教育委員会事務局主査
	市村 真理	市教育委員会事務局主事
	山本 伊都子	市教育委員会文化財調査員
	藤沢 和枝	市埋蔵文化財センター職員
作業参加者	高橋 喜久治・万場義秋・高橋武・岩井伸夫・宮本鈴子・阿部智子	
協力者	小林三平(地権者)・鈴木武(地権者)・山岸岩雄(地権者)・滝沢きみ江(地権者)・小菅区・小林清和・鷺尾恒久	

小菅大聖院 史跡調査研究委員会組織（平成13年度）

会 長 蒲原 良典 小菅神社氏子総代会長

実行団体 小 菅 区 真島勝秀区長・真島昭一副区長
小菅の里文化財保護委員会 小林清和会長
小菅むらづくり委員会 真島一徳委員長
小菅神社氏子総代会 蒲原良典会長
いいやま博物館友の会

（準備委員会出席者 真島昭一・石森俊孝・真島基高・蒲原良典・真島一男
吉原和義・鷺尾恒久・小林清和・真島一徳）

事務局 石田 一彦 市企画財政課広報・地域振興係長
望月 静雄 市教育委員会事務局

調査担当 望月 静雄

作業参加者 市村文昌・小林清和・蒲原良典・蒲原澄男・小林収高・広瀬一雄
小林堯・真島今朝義・丸山重守・真島基高・望月武

指導・協力者（順不同・敬称略）

笹本正治（信州大学教授）・広瀬喜作・武内五男

- 5 本書は、高橋桂団長指導の下、小林正子・藤沢和枝の協力を得て調査を担当した望月静雄が執筆したが、Ⅱ-2-(3)の銅鏡説明については文化女子大学中野政樹教授の鑑定結果を同教授の承諾をいただいて転載した。
- 6 確認調査の出土遺物・調査図面等は飯山市埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

例 言

I	大菅遺跡・小菅大聖院跡調査の目的と経緯	1
1	確認調査の目的	1
(1)	大菅遺跡	1
(2)	小菅大聖院跡	1
2	経緯	3
(1)	大菅遺跡	3
(2)	小菅大聖院跡	4
II	遺跡の環境	5
1	自然的環境	5
2	大菅・大聖院の歴史的環境	5
(1)	大菅	5
(2)	小菅大聖院	9
(3)	小菅神社関係の考古学的資料	10
III	大菅遺跡の確認調査	19
1	概要	19
(1)	I区	19
(2)	II区	19
(3)	III区	19
(4)	IV区	19
(5)	V区	19
2	各調査区の状況	22
(1)	I区	22
(2)	II区	22
(3)	III区	25
(4)	IV区	28
(5)	V区	28
(6)	石積みについて	32
IV	小菅大聖院確認調査の概要	33
1	調査区	33
2	調査	33
(1)	大聖院の規模	33
(2)	発掘調査	37

I 大菅遺跡・小菅大聖院跡調査の目的と経緯

1 確認調査の目的

長野県飯山市瑞穂地区に所在する小菅地区は、白鳳年間に役小角が草創したと伝えられる小菅山を中心としたかつての修験の地である。中世には飯綱・戸隠と並び北信濃三大霊場として栄えたといわれ、重要文化財の小菅神社奥社本殿をはじめ板絵著色三十三身図・桐竹鳳凰文透彫奥社脇立・両界曼荼羅図（いずれも県宝）など国・県・市指定文化財だけでも14件もの指定文化財がそれを物語っている。また、多くの建物はその後の戦乱や老朽化により消滅したが、西大門・講堂・護摩堂などは同じ場所に残されており、地域一帯が現在でも修験の里としての史香を色濃く漂わせている。

近年、過疎化に端を発し少子高齢化現象が顕著になるや、戸数70戸余りの集落ではこれらの建物維持や文化財の管理などが大きな負担となっている。小菅地区では神社総代会をはじめ村づくり委員会などが中心となって文化財の維持や環境保護について取り組みを行ってきた。このような状況の中で、飯山市としても文化遺産保護と活用の観点から、信州大学人文学部笹本正治教授を文化財アドバイザーに委嘱し、小菅をはじめとする市内の文化遺産について新たな観点からの取り組みをはじめている。

今回確認調査を実施することとなったのはこうした流れの中での取り組みであり、文化遺産を地域が真に理解することから着手し、保護と活用に向けて新たな方策を共に探ろうとするものである。

(1) 大菅遺跡

大菅遺跡は、北竜湖東岸の字大菅に所在する遺跡である。中・近世の古文書や古絵図には「大菅」として記載されており、中世には村落や小菅山元隆寺の領域として「五智堂」「極楽坊」などがあったとされている。現在は昭和二・三十年代に植栽された杉が鬱蒼と生茂っているが、小菅山の重要な一角であった大菅地区の調査は必要な案件であった。

平成13年5月、学校法人文化学園の大沼理事長より大菅地区にある石垣について照会を受けた。北竜湖岸周辺は北竜湖遺跡として飯山市遺跡分布図に登載されているが、大菅地区については、中世から知られていた場所であったけれども「遺跡」としての具体的証拠もなかったことから未登載であった。そのようなときに前記照会を受けたので、石垣の調査とあわせて大菅遺跡の確認調査を実施する必要に迫られた。幸いにも文化学園の全面的なご支援がいただけることとなり、平成13年度事業として確認調査を実施することとした。

(2) 小菅大聖院跡

小菅大聖院は、小菅山元隆寺別当が居住した寺域中枢の建物で、昭和三十年代の末頃に解体されたという。小菅集落の東上方、奥社参道の南側の敷地に壮大な石垣に囲まれた小菅修験の地として

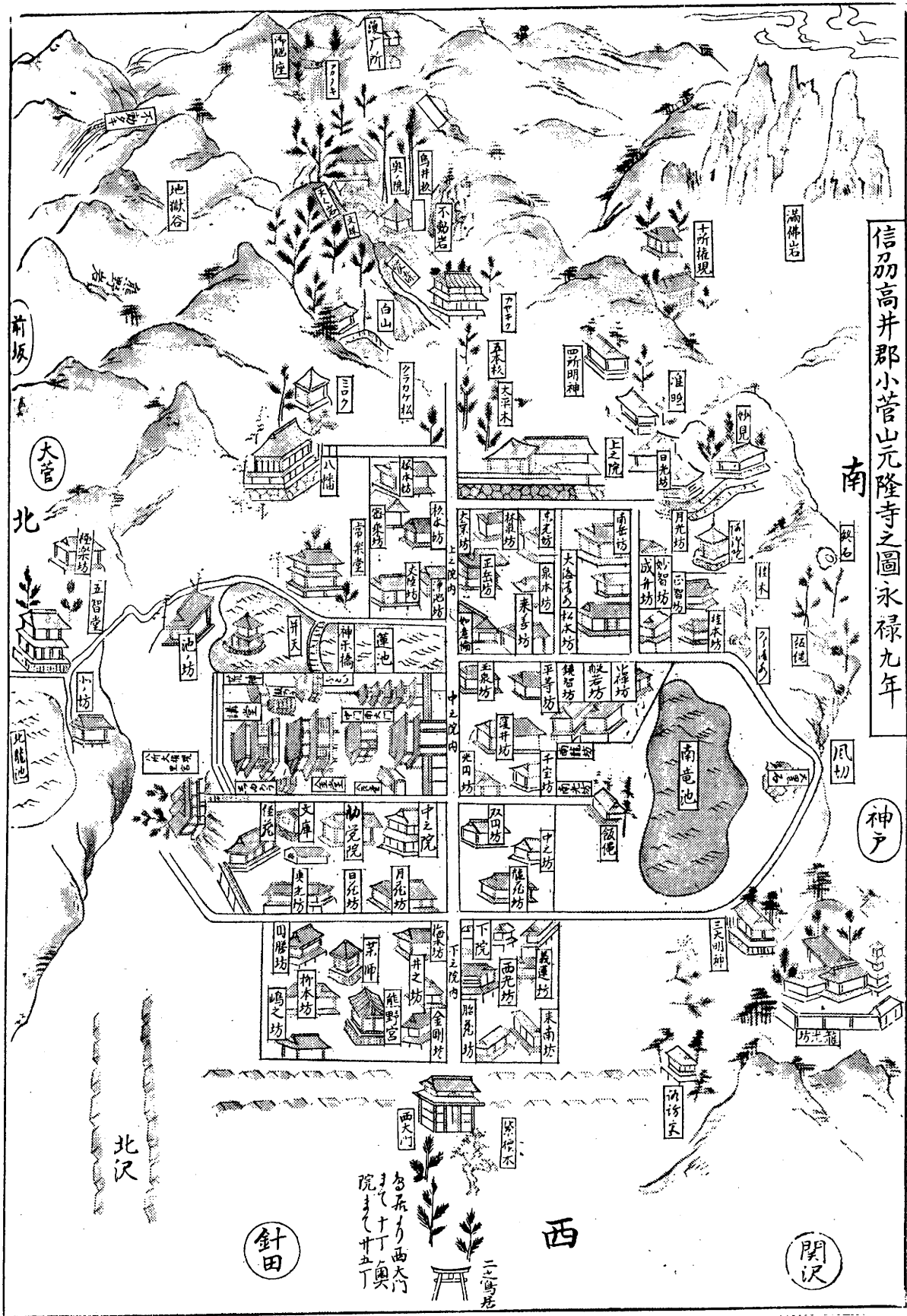


図1 小菅山元隆寺絵図（長野県町村誌より）

最も史跡地として相応しい場所であるが、現在は護摩堂の建物や庭園が隆盛した頃の面影を僅かに偲ばせているにすぎない。また、権威ある場所だということで、昭和に至っても大聖院建物の中に入れる人は限られており、詳細に承知されている方はほとんどいなく、間取りさえも正確にすることができないでいた。

飯山市では、信州大学笹本教授の指導をいただく中で、奥社参道と大聖院敷地一帯が最も信仰の地小菅を良く遺している場所であり、池や護摩堂建物の保護について考えていくとともに大聖院についてもその実態を把握するために確認調査を実施することがまず必要であるということとなった。

調査体制は、何よりも市民により考えていくことが必要であるとの観点から、飯山版NPO団体に呼びかけて調査研究組織を立ち上げることとした。調査は飯山市教育委員会の指導により、調査組織のメンバーの多くが参加して行われた。

2 経緯

(1) 大菅遺跡

平成13年5月21日 文化学園大沼理事長と大菅地区の遺跡地について懇談。

6月25日 文化学園田村総務本部長と詳細について協議（調査は飯山市が行い、教育委員会が主体となって行う。経費等を含め文化学園がこれについて支援を行う。）

9月14日 大菅遺跡確認調査に伴う役員委嘱を行う。

9月20日～30日 調査個所の地権者に発掘同意を依頼。

10月1日 調査準備。器材搬入、テント設営。降雨のため午前にて作業中止。

2日 弁天島地区をⅠ区として2箇所にてトレンチを設定。杉林内を刈り払い機により草刈り。

3日 Ⅰ区A・Bトレンチ調査続行。弁天島南約100mの個所にトレンチを設定。Ⅱ区とする。Aトレンチより陶器片出土。

4日 Ⅱ区新たにBトレンチに着手。Ⅰ区Bトレンチ遺構か。

9日 Ⅰ区A・B両トレンチ清掃の後写真撮影完了。Ⅱ区Aトレンチ、地山面まで調査完了。Bトレンチ続行、Cトレンチ新たに着手。

11日 Ⅱ区A～Cトレンチ調査続行。Ⅲ区を新たに設定。

12日 Ⅱ区調査続行。Ⅲ区A続行、黒色土が厚い。公図と調査区の対比を行う。

15日 Ⅱ区Bトレンチ、写真撮影後再度掘り下げを行う。Cトレンチ、掘り下げ続行。南北両端のみを地山面まで深掘りを行う。Ⅲ区Aトレンチ続行。遺物は認められない。Bトレンチ草刈り着手。Ⅲ区上方に炭焼窯を発見。

16日 Ⅱ区再度掘り下げ。Cトレンチ清掃後写真撮影完了。Ⅲ区Aトレンチ続行。Bトレンチ着手。

19日 Ⅳ区に4箇所のトレンチを設定。

22日 IV区着手。V区を設定。

24日 IV・V区調査続行。大菅調査役員会議開催。現地視察、会議を文化北竜湖山荘にて行う。

25・30・31日 各調査地区清掃後写真撮影を実施して終了。

(2) 小菅大聖院跡

平成13年10月18日 小菅農業改善センターにおいて「修験の里小菅」史跡調査研究事業に伴う準備委員会を開催。

11月5日 午前9時より市役所企画財政課石田係長及び生涯学習課丸山課長補佐出席により開始式を開催。終了後跡地内の草刈り等を行う。

6日 雨の中を跡地内の枯れ枝処理を行う。

7日 枯れ枝処理引き続き実施。杉木立内より礎石がいくつも確認。グリットを設定する。

8日 礎石検出作業及びグリット杭打ち作業を実施。

(午後市施設監査及び市内小学校5学年会教師埋蔵文化財研修)

9日 跡地内清掃。D-6より調査に入る。

12日 D-5～7、C-4調査。

13日 続行

14日 県文化財保護研修会のため作業休み。

15日 Dライン及び4ラインを調査、清掃。

16日 護摩堂東側及び調査区全体を清掃後写真撮影。市長視察。

17・18日 土・日を利用して平面図作成。

19日 午前中片づけ、器材搬出作業を実施してすべてを終了する。

Ⅱ 遺跡の環境

1 自然的環境

大菅遺跡・小菅大聖院跡は、長野県飯山市大字瑞穂地区に所在する（図2・3）。旧下高井郡瑞穂村で、昭和29年8月の町村合併により飯山市となった。

飯山盆地は、東西約6km、南北約15kmの紡錘形の小盆地である。盆地西縁は、黒岩山（938.6m）、鍋倉山（1288.8m）等比較的低い関田山脈（東頸城丘陵）によって画されている。ここには越後に通ずるいくつかの峠道が知られている。一方、盆地東縁は毛無山（1649.8m）等三国山脈の支脈によって、また断層構造線に沿って急峻な山地で画されている。飯山市瑞穂地区は、盆地東縁の山麓および千曲川河岸に面した段丘・丘陵上に立地している。

大菅遺跡は毛無山の中腹、断層線に沿って形成された構造的湖（飯山市誌自然編）である北竜湖東岸に位置する。字大菅は東岸の北から南端までを含む。標高は湖水線で約500mであり、盆地底との比高差は約200mを測る。北竜湖は現在灌漑用溜池として利用されており、かつては南側にあった早乙女池と北側の北竜池を併せて北竜湖としたという。そのため湖の周囲はかなり削土されている。また、特に湖の北半の周囲から旧石器～平安時代の遺物が多く採集されており、北竜湖遺跡として登録されている。大菅遺跡については、中世文書等に現れる地名であるが、これまで遺物などの確認がなされていないため分布図には未掲載であった。

小菅大聖院跡は、北竜湖の南側の小菅地区にある。北竜湖と同様に毛無山の中腹に位置し集落のほぼ中央を断層線が横走する。集落は発達した扇状地上に立地し、西の盆地底に向けて広がりを見せる。集落東上方は、幅約750mの西に開いた馬蹄形の崩壊凹地が認められ、小菅神社奥社本殿もこの中に位置している。

大聖院跡は、小菅集落の最も東上方の奥社参道入口南側にある。

2 大菅・大聖院の歴史的環境

(1) 大菅

大菅について触れられているものに昭和6年にまとめられた森山茂市氏の「増訂小菅神社誌」がある。その部分について旧字が多いがほぼ原文のまま以下に引用する。

「第二章 第十節 小菅神社の参道 略 北参道は前坂口から入るべく、小山を越えて北龍池へ出るのである。東西ニ通路あり、池東に出れば辨天祠を拜し、實彈射撃場に立って北方茂る學林を顧み、アゼスゲに交る薄荷の芳しさと千屈菜の愛らしさとを後にして大菅村の遺跡を訪ひつつ字コエンドに向ふ。又池西に出れば閘門の辺に腰を卸して、遊船ニ隻が乃の聲高く蓴菜の間を漕ぎて、数個の浮島に赤黒の鯉魚が出没隠顯するに興じつつ是亦コエンドに会する。それから坂路を下つて、古の所謂加耶吉利堂即ち馬頭觀音堂を伏拜み、菩提院を横に見て表参道に合するのである。此

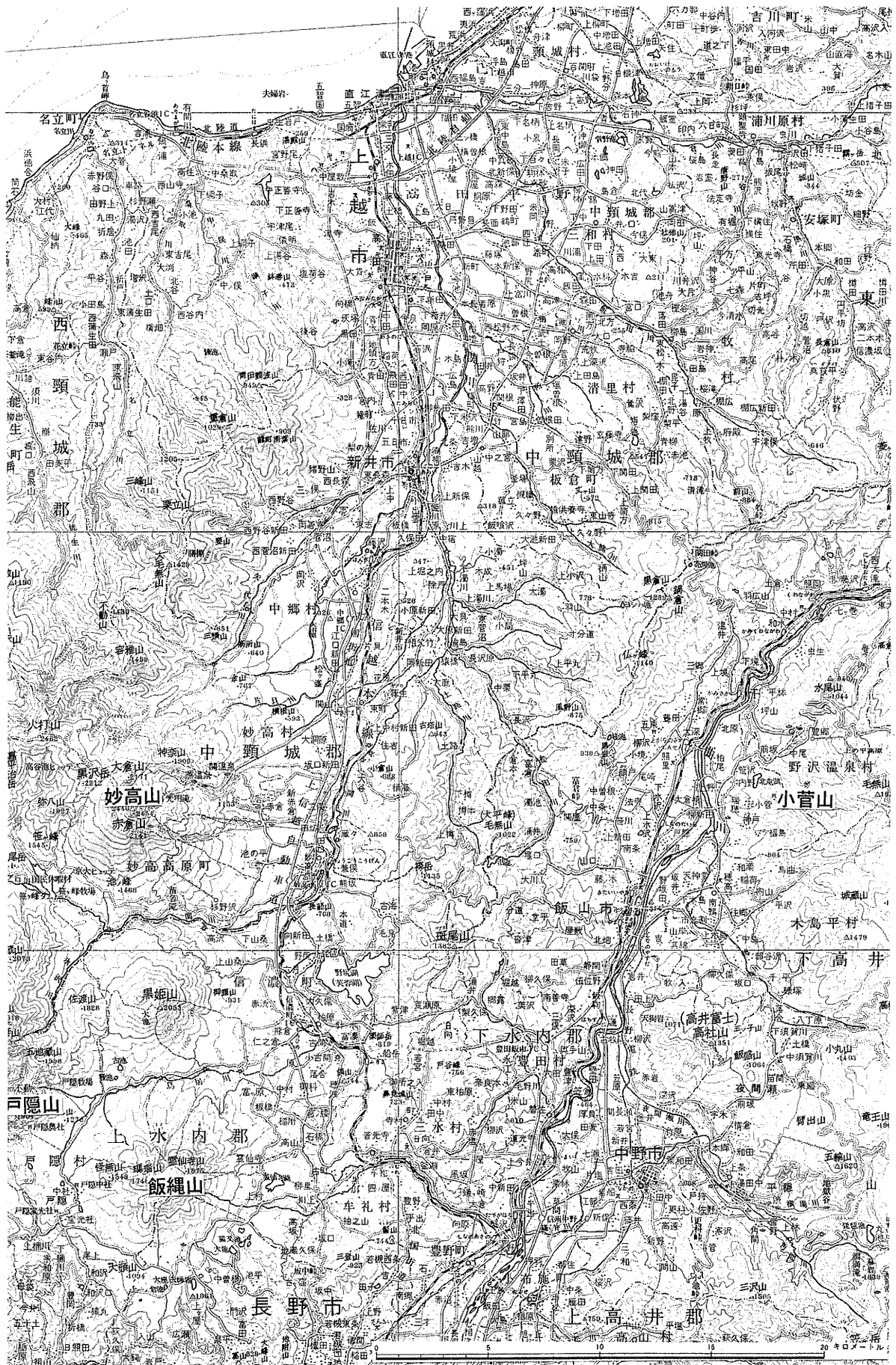


図2 小菅山・妙高山・戸隠山・飯綱山位置図 (国土地理院発行地勢図「高田」20万分の1を30万分の1に縮小)

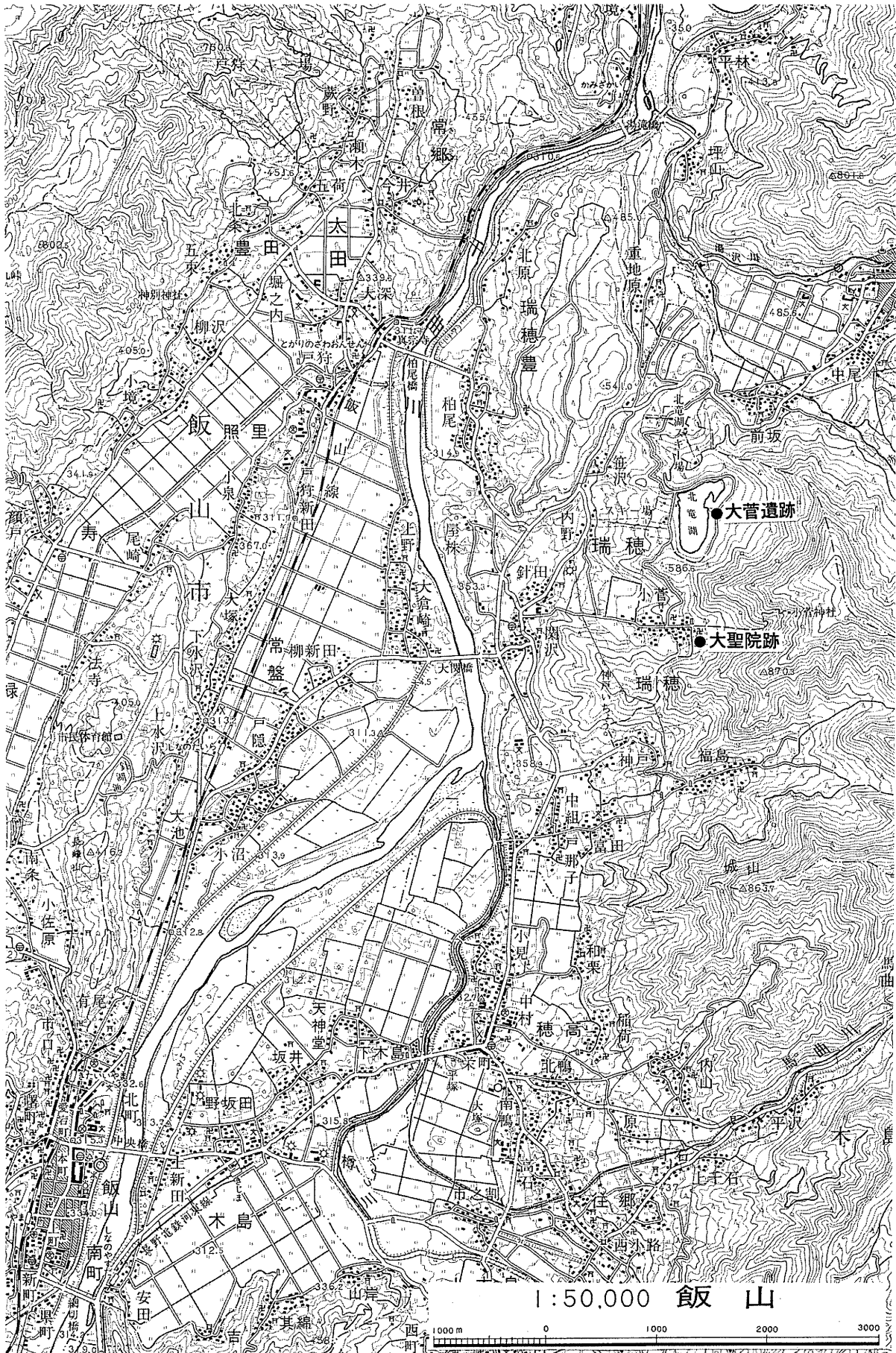


図3 大菅遺跡・小菅大聖院跡位置図 (1:50000)

の北参道は野沢温泉よりすれば比較的緩勾配の間道だから浴客の多数は細道ながら此のコースを選ぶのである。

第三章 十三節 傍證的の出土品及文獻

小菅の先史時代は何如なる情状であつたか固より知るべきでないが、今石器時代の遺物として、石鏃・石斧・石槍・石刀・石匙・石砥・石棒・土器破片等の出土品が多いのを見れば、太古原民族の住所であつたことが明かである。殊に當区の蒲原林蔵氏が明治三十二年四月中、附近の宅地を墾鑿して水田を拓く工事に方り、地表の黒色壤土層一尺位鋤去した下の赭黄色の底土層に、掘立柱の址らしい圓孔の規則正しく排列すると發見したといふ。思ふに是は先住民族の住居の跡であらう。此處から石器類数点を拾い取って現に之を保存して居る。

有史以後の遺物としては、古刀・奇形の鍬（或は鋤か）・焔餘の木像等の發見された物数点あつて往時を追想されるのである。

一、古刀 一口

字大菅の巨石の下より出た無銘の刀で、甚しく腐蝕しているが鐔は完全である。鷲尾常次郎の所蔵だ。

一、古鍬（或古鋤） 二枚

甲は小林元二郎の所蔵品で、字大菅小字新奥堂から出た。長さ40.6cm、幅は刃部13.3cm、脚部18cm、脚部の末端3.7cmで、両脚の内側から刃部まで三方深い溝がある。量目1.5kgで鑄造物らしい。

乙は下高井農林学校の所蔵品で、鷲尾常次郎が大正十四年九月、大菅池の東方小字清水で石間から得た物であつたが、翌年三月同校に寄附したのである。小林氏の物より稍小型で、長さ6cm短い。脚部に四個所修理した所があり、巾3cm位の鉄板を被覆してある。量目1.3kgで此の方は鍛製だ。

一、聖徳太子の木像 一體

焼け焦げて双手を欠き刀法等不明なるが、鑑定家は聖徳太子の立像だといふ。高さ二十糎。明治十四、五年頃小菅字蓮池北方山地の路傍で拾得され、今編者の許に安置してある。永祿の兵火に焼けて土中に埋没したものらしい。

一、古鏡 三面

文政十年七月吉原六左衛門方（今の亀蔵の祖）宅地方より掘出したもので、銅質帯白色で美しい。裏面に「天下一若狭」。以下略

第四章 小菅神社付近の勝區及舊蹟 第十九節 北龍池

往昔小菅山繁盛の頃、蓮池・南龍池・北龍池とて併稱されし頃には蓮革の馥郁に昔ながらの床しさを偲べるだけで、面積も昔時の何分の一に減じた。又南龍池は全く淺せて稻田と化し、字「池田」といって名残を留めているが、今でも深い處は泥中に長材を横へ、其の上を渡って稻を作るのである。此等両池は全く觀を留めぬが、唯北龍池のみ依然として舊態を存し、通稱地字に依つて大菅池といっている。東西六百七十歩（約百四十米）、南北八百六十歩（約百八十米）ばかり、周回四軒弱、面積千九百廿五安ばかりで田用水の貯水池である。春は水量最も富み、碧浪の緩く漂う處に深緑の松杉を浸し、秋は水大に涸れて、蘆荻の骨立する。略」

以上のように、執筆された昭和の初期には多くの人が「大菅村の遺跡」を承知していたらしく、実際に遺物も出土している。ただし、その位置については弁天島から「コエンド」にいたる間くらいしか説明しておらず、現在の大菅の南半を指す程度しか判明していない。

(2) 小菅大聖院

大聖院は、天正年中（1580～90年頃）再興されたといわれている（小菅神社誌・旧瑞穂村誌など）。これは永禄4（1561）年、川中島合戦の余波により小菅山が奥社などを残し灰燼に帰したといわれており、この時大聖院も焼失したものと推測される。後、大聖院別当らが中心となって天正19（1591）年に奥社を再建したとあり、この頃までにすでに大聖院は再建されていたと考えられることから、前記再興された時期はほぼ正確なのではないかと考えられる。

さて、この大聖院の草創は不明だが、平安時代後期の作と考えられる本地仏の木造馬頭観音坐像の存在から、小菅山元隆寺は平安時代末には成立していたと考えられ、その中核であった大聖院もその頃までさかのぼることができるのではないかと考えられる。

また、大聖院別当については次のような記録がある。

永正5年（1508） 大聖院別当澄畔 奥院三社頭造立
永禄4年大聖院自体焼失の後、

- 1 神袋防（恵秀）が中興（寛永中寂1630年前後）
- 2 憲秀 暦元（1652）年寂
- 3 恵儀 寛文12（1672）年寂
- 4 恵我 元禄3（1690）年寂
- 5 恵照 享保14（1729）年寂 村越氏
- 6 恵舜 宝暦12（1762）年寂 義泉防 真島氏
- 7 秀光 寛政12（1800）年寂 井出氏
- 8 孝如 寛政5（1793）年寂 大量防 青木氏
- 9 誠孝 文化14（1817）年寂 明道防 山岸氏
- 10 英巖 天保10（1839）年寂 安沢氏
- 11 英眞 武内元隆 遠藤氏 復職して神主
- 12 武内廣助 明治14年早世
- 13 武内元隆 再任 明治26年逝
- 14 武内英俊 明治25年12月12日奉仕 （森山茂市 小菅神社誌による）

そして、大聖院の建物に関しての記録は次のとおりである。

永禄4年（1561） 武田信玄の侵攻により焼失（伝承）

天正年中（1580年頃か） 再建

寛延3年（1750） 大聖院内護摩堂建立（このとき大聖院も改修があったかもしれない）

昭和30年代後半 建物解体（材は山ノ内町に移転されたという）

昭和60年（1985） 跡地に石碑建立

大聖院は間口18間、奥行き7間といわれているが、詳細な図面は不明である。今後さらに文献調査を進めていく必要がある。

(3) 小菅神社関係の考古学的資料

小菅地区の考古学的な調査は、これまでほとんど行われることがなかった。1977年飯山北高等学校地歴部OB会刊行の遺跡分布調査報告では、小菅奥社・小菅里社・南竜池の各遺跡が掲載されており、奥社では縄文後期土器、里社では縄文前期土器・土師器、南竜池では土師器が採集されている。これらは直接小菅神社と関わる遺物ではないが、近年の詳細分布調査や奥社改修工事等に際して遺物が収集されていることが判明した。また、地域住民によってかつて住宅付近で発見された信仰資料を保管されていることも判明しつつある。

こうした状況を受けて飯山市教育委員会では、平成13年度作成の埋蔵文化財分布図において、現小菅集落は小菅山元隆寺の区域と重複することから全域を小菅修験遺跡として掲載することとした。さらに、既出資料の図化を進め以下の資料をこれまでにまとめることができた。

1) 小菅神社宝物庫保管資料 (図4～図5・表1・写真1)

現小菅神社宝物庫に保管されている資料で、主として昭和41年から43年3月にかけて実施された奥社本殿修理工事によって発見されたものであるという。資料は土器(かわらけ)、銭貨、銅鏡などである。なお、銅鏡については発見経緯が明確でない。このほか硯・椀なども保管されている。

土器 (図4)

17点あり、17の1点を除いてすべて口径8cm以内の小形土器皿である。回転台で成形され、底部には回転糸切り離し痕をとどめる。形態は、やや内湾気味に立ち上がるもの(3.5.6.8.10.11.14.15.16)と直線的に開くもの(1.4.7.9.)とがあるが、歪な固体が多く、形態についてはそれほどの意識はないように見受けられる。また、4・5・8・10・11・14・16の7点は内・外ともに黒色を呈しており、とくに4・5・10・16はタールや煤が明確に付着していることから灯明皿として使用されたことが伺える。他の土器は橙褐色を呈している。

これらの土器の所属年代については、16世紀から18世紀頃のものと思われる。

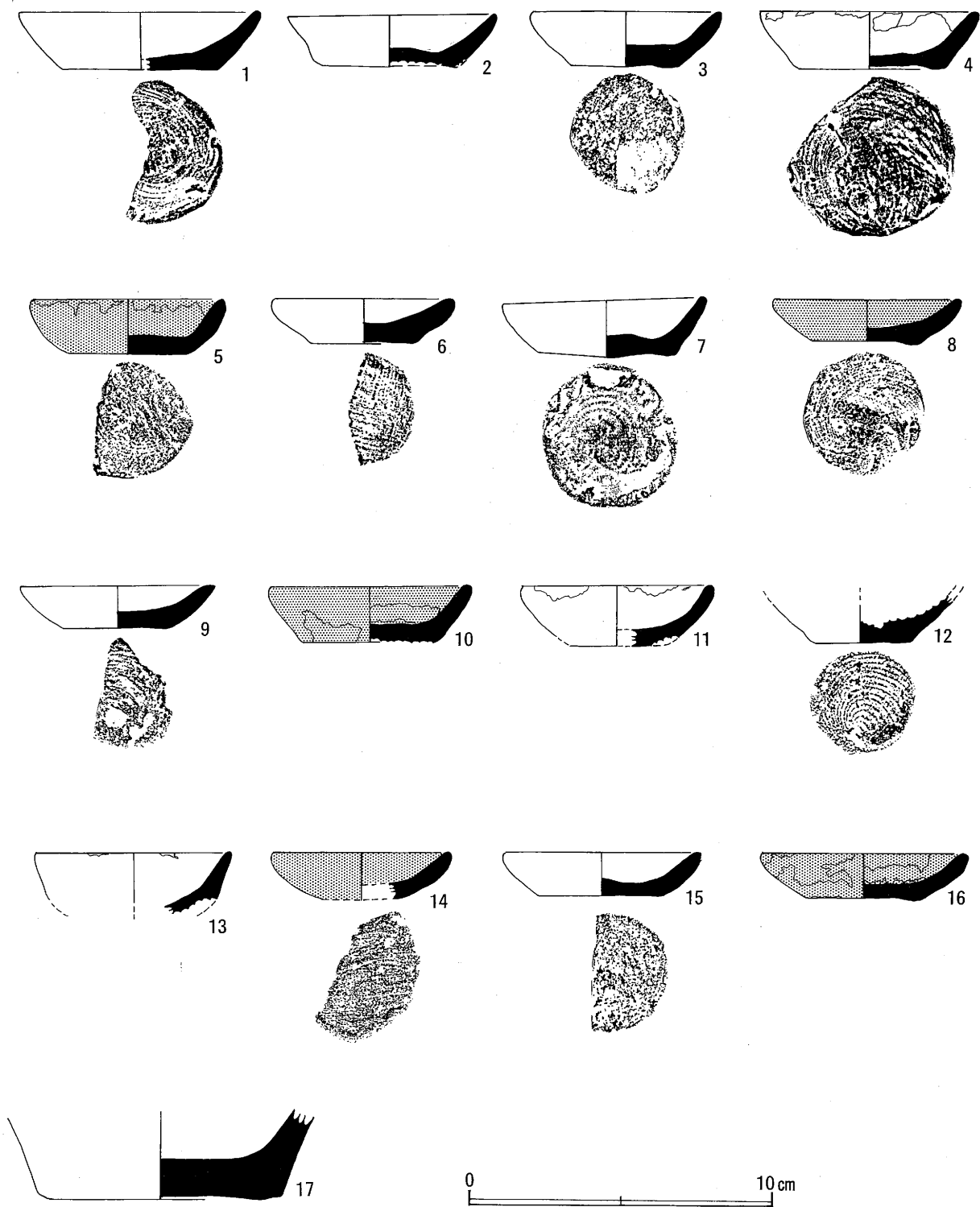


图4 小菅神社宝物庫保管資料（土器）（1：2）

錢貨（図5）

錢貨は23枚保管されている。1～8については中国からの輸入錢貨で、9～23は近世の国産品である。初鑄年の古いものもあるが、これらは中世全般にわたって流通したものであり、近世初期においても、寛文10（1670）年の寛永通寶以外の使用を禁ずるお触書が出された頃まで渡来錢が寛永通寶と混在して使われていたという。

各錢貨については下表のとおりである。

図番号	錢貨名称	初鑄年（西暦）	直径mm	重さ	備考
1	開元通寶（隸）	武徳4年以後（621～）	2.5	3.7	
2	天聖元寶（楷）	天聖元年（1023）	2.4	3.1	
3	皇床通寶（篆）	寶元2年（1039～）	2.4	3.1	
4	元豊通寶（行）	元豊元年（1078）	2.5	4.3	
5	元符通寶（篆）	元符元年（1098）	2.4	3.3	
6	元符通寶（篆）	元符元年（1098）	2.4	3.4	
7	政和通寶（篆）	政和元年（1111）	2.4	3.7	
8	紹熙元寶（楷）	紹熙年間（1190～94）	2.4	2.9	背下に「二」,「三」の剥落か
9	寛永通寶		2.5	3.3	
10	寛永通寶		2.5	3.7	
11	寛永通寶		2.4	3.3	
12	寛永通寶	寛文8年（1668）～	2.5	3.5	背上に「文」
13	寛永通寶		2.4	3.1	
14	寛永通寶		2.5	3.4	
15	寛永通寶	明和6年（1769）～	2.8	5.0	明和4文錢 11波
16	寛永通寶		2.2	2.1	
17	寛永通寶		2.2	2.6	
18	寛永通寶		2.3	3.2	
19	寛永通寶		2.5	3.0	
20	寛永通寶	元文元年（1736）～	2.5	3.4	背上に「元」
21	寛永通寶		2.4	2.8	
22	寛永通寶		2.2	2.4	
23	寛永通寶		2.2	2.4	

表1 保管錢貨一覧表

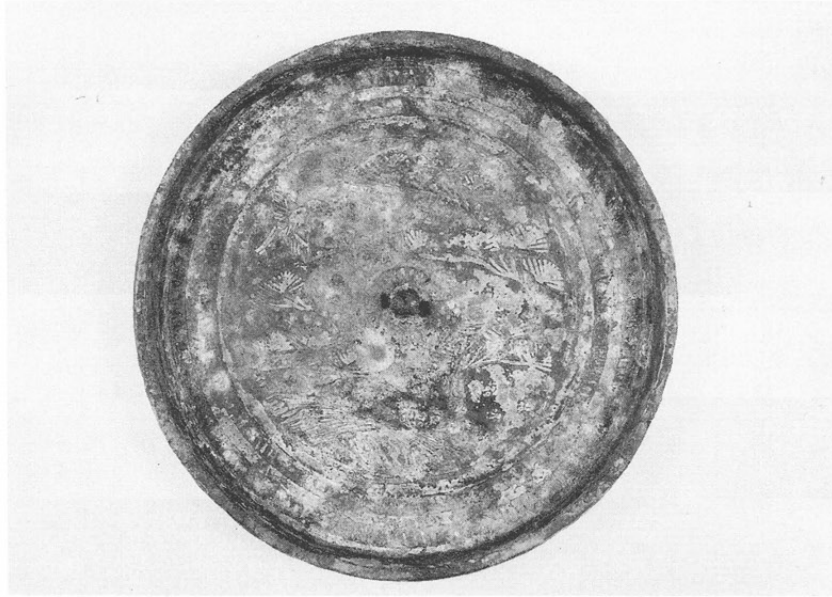


写真1 小菅神社宝物庫保管資料(銅鏡)(上 州浜松樹双雀鏡 中 垣根柳樹双雀鏡 下 菊文散双雀鏡)

銅鏡 (写真1)

1 州浜松樹双雀鏡 室町時代

径 8.55cm

縁幅 0.2cm

縁厚 0.6cm

外傾式中縁 菊座素円鈕

全体に青錆が覆っており、鏡背文様は模糊としているが、外区には鋸歯文帯と界圈を巡らし、内区は波の寄せる洲浜の上に松樹が聳え、左に双雀の遊舞する情景をあらわす典型的な室町期の擬漢式鏡である。表面は緑青が付着し荒れているが、一部に錫メッキした当初の鏡面がみえる。

2 垣根柳樹双雀鏡 室町時代

径 7.1cm

縁幅 0.25cm

縁厚 0.3cm

直角式低縁 菊座素円鈕

鏡表面、鏡背ともに緑青が付着し荒れている。全体を青錆が覆っており、腐蝕も酷く、鏡背文様は模糊としている。界圈がなく、鏡背前面に垣根越しに柳樹が風に揺らぎその下に二羽の雀が乱舞する情景をあらわしている。題材は鎌倉期のものにみられるが肉取表現からみて時代は若干下るものといえる。

3 菊紋散双雀鏡 室町時代

径 5.4cm

縁幅 0.1cm

縁厚 0.4cm

直角式中縁 菊座素円鈕 鈕穴なし

鏡表面、鏡背ともに青錆が覆っており、歪損がある。腐蝕も酷く、鏡背文様は全体に模糊としているが、単圈を巡らし、鏡背全面に菊紋を散らし、上部に双雀を配して文様としている。小鏡であり、鈕穴が空けられていない点からみて実用とされたものではない。上部縁に近く穴が穿たれており、御正体として懸垂されたものであろう。

(本文は、2001年 文化女子大学中野政樹教授鑑定結果抜粋である。)

2) 小菅集落内既出・採集資料 (図6・7)

1999年7月、笹本信州大学教授を中心とするメンバーの採集資料、同年10月に市教委が実施した村内踏査において採集された資料及び蒲原良典氏保管資料である。採集資料には縄文時代から近・現代までの土器・陶磁器があるが、整理作業が済んでいないため本稿では珠洲陶器のみを掲載した。

小菅地区で採集した珠洲陶器は、蒲原氏所有の遺物を含め計12点である。内訳は、甕8点 (図

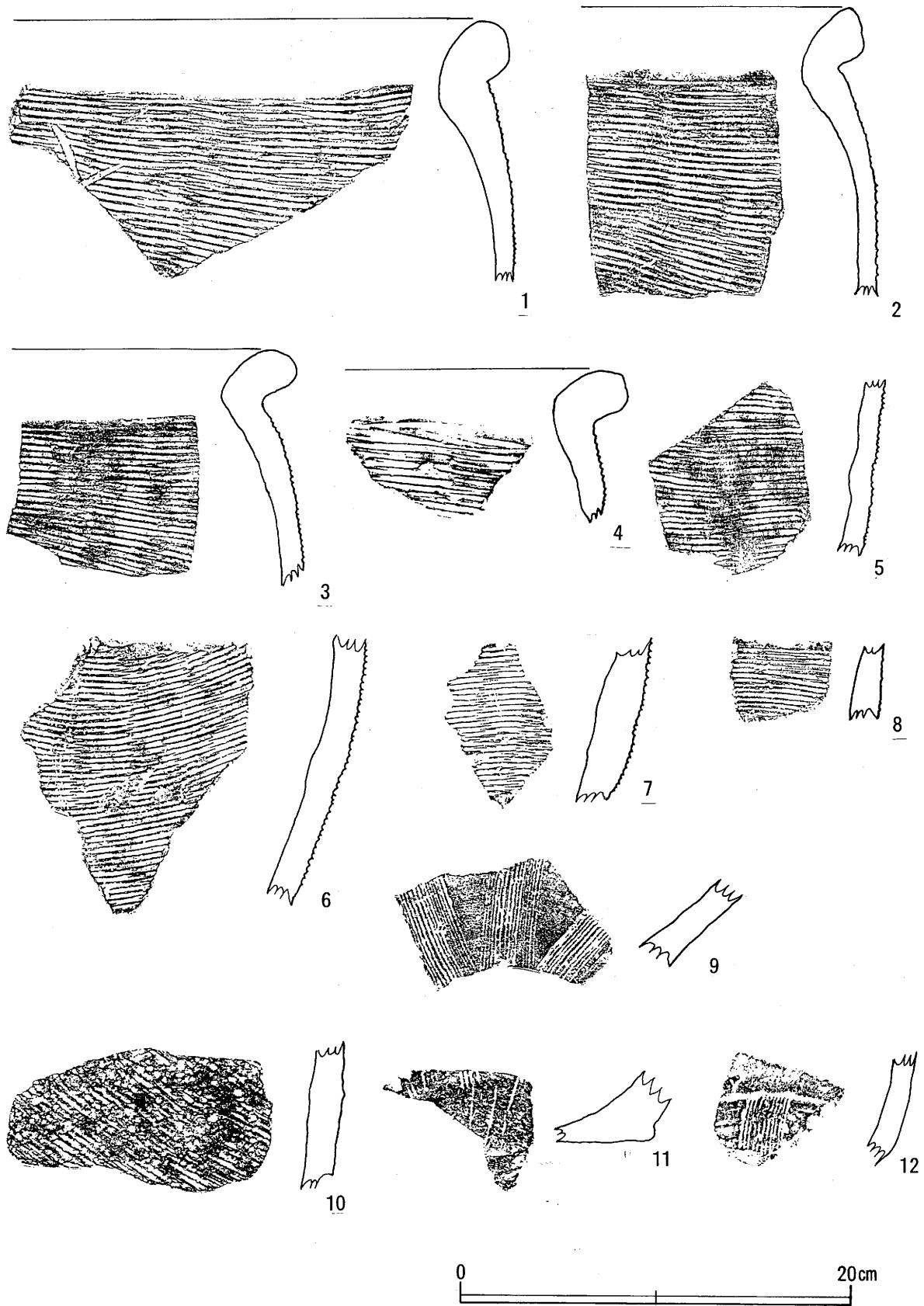


图6 小管集落内既出資料 (珠洲陶器) (1:3)

1～4・6～8・10)、壺1点(図5)、片口鉢3点(9・11・12)である。

甕

1～4は口縁部から胴部に至る部分で、口縁形態はしっかり外反させるが、肩の張り出しが弱く、胴径が口径を僅かに上回る形態である。1の胴部には「×」ないしは「V」の刻文が認められる。6～8・10は胴部破片である。

以上の甕は、形態から珠洲編年のⅣ期ないしはⅤ期(14～15世紀前半)に位置付けられる。ただし、3の甕については、口縁がしっかりと引き出されていることからⅣ期でも前半だろう。

壺

1点のみの出土である(5)。壺Ⅰ種と呼ばれる綾杉状類似仕上げの特徴的なものである。口縁形態が不明のため明確な時期は下し得ないが、装飾的効果の薄い綾杉状仕上げはより退化的現象と捉えⅤ期(15世紀前半)と考えられる。

片口鉢

三点出土している(9・11・12)。9は太く幅広い原体により深い直線16条の卸し目がつけられる。11はかなり使用されたためか底面には卸し目が明確ではないが、その上部には密に施されているのがわかる。12は、11条の卸し目で器全面に施されてはいない。以上の年代も口縁部が不明のためはっきりしないが、9は特徴から第Ⅳ期に位置付けられ、他もほぼ当該期に含まれるものと思われる。

以上概説してきたが、採集遺物及び蒲原氏所蔵珠洲焼は概ね珠洲編年の第Ⅳ～Ⅴ期を中心とした年代と考えられ、その絶対的年代は西暦1400年前後に置かれるものと考えられる。

次に、採集した地点について触れておきたい。蒲原氏所蔵の遺物は図の1・2・3・5・9・15と図示した半数を占める。残念ながら採集地点は明確ではない。蒲原氏は住宅付近あるいは大菅と推測されているが、大菅だとすればかつて極楽坊や五智堂があったとされる場所であり、1356年の小菅寺合戦に登場する地名でもある。他の遺物は、4・7・12が地図番号(図7)の15地点、6が20地点、8が10地点、11が12地点である。これらの地点は、永禄9年とされる元隆寺絵図と照らし合わせるにより、坊と比較することもできよう。

ただし、あくまでも採集品による推測であって、より明確な中世の小菅を浮かび上がらせていくには発掘調査等の作業も必要になってくるだろう。

Ⅲ 大菅遺跡の確認調査

1 概要

字大菅は北竜湖東岸から山地にかけての広い範囲であり、そのほとんどに石積みの痕跡が認められている。これらの大半は、近世から昭和二十年代までの長期間小菅村の畑や一部水田として利用されてきたその痕跡を示すものと考えられている。ただし、中世には大菅村が存在したことから、石垣で区画された一部にはそうした中世村落の存在を示す可能性も考えられた。そのため、村落の存在の痕跡を明らかにすることに主眼を置き、村落の範囲についても明らかにできればと考え、比較的広い範囲に次の5箇所を選定した（図8）。

(1) I区

字大菅7407—イ・ロで、所有者は小菅区である。弁天島内で古くから北竜湖遺跡F地点の範囲内にも含まれている。2箇所にてレンチを設定した。

(2) II区

湖拡張により水面下となった地点で地番は存在しない。所有者は湖の所有者の小菅区であり、現地番7401・7391の湖側となる。渇水期には現れ、石垣も波に現れてやや崩れているが輪郭はほぼ残している。3箇所にてレンチを設定した。

(3) III区

弁天島に下る市道の東側で、字大菅7519番地である。所有者は小菅の小林三平氏の山林である。かつて「さぐざえむ屋敷」と呼称していたとされ、大菅では唯一屋敷伝承の残されている場所である。2箇所にてレンチを設定した。

(4) IV区

大菅地区内の南側で、地番は7545・7546・7717番地である。所有者は野沢温泉村鈴木忠氏および小菅山岸岩雄氏である。かつて字清水と呼称されていた場所であり、近くに湧水も認められる。その個所にはサンショウウオも確認された。「小菅神社誌」にこの字清水で古鋤が採集されたとの記載があることから調査を行うこととした。レンチは4本設定した。

(5) V区

地番は7534で、小菅の滝沢きみ江氏所有地である。すぐ傍に大石がある。市道周辺は別荘地として売却され、多くが市外の方の所有地となっている。1箇所のレンチを設定した。

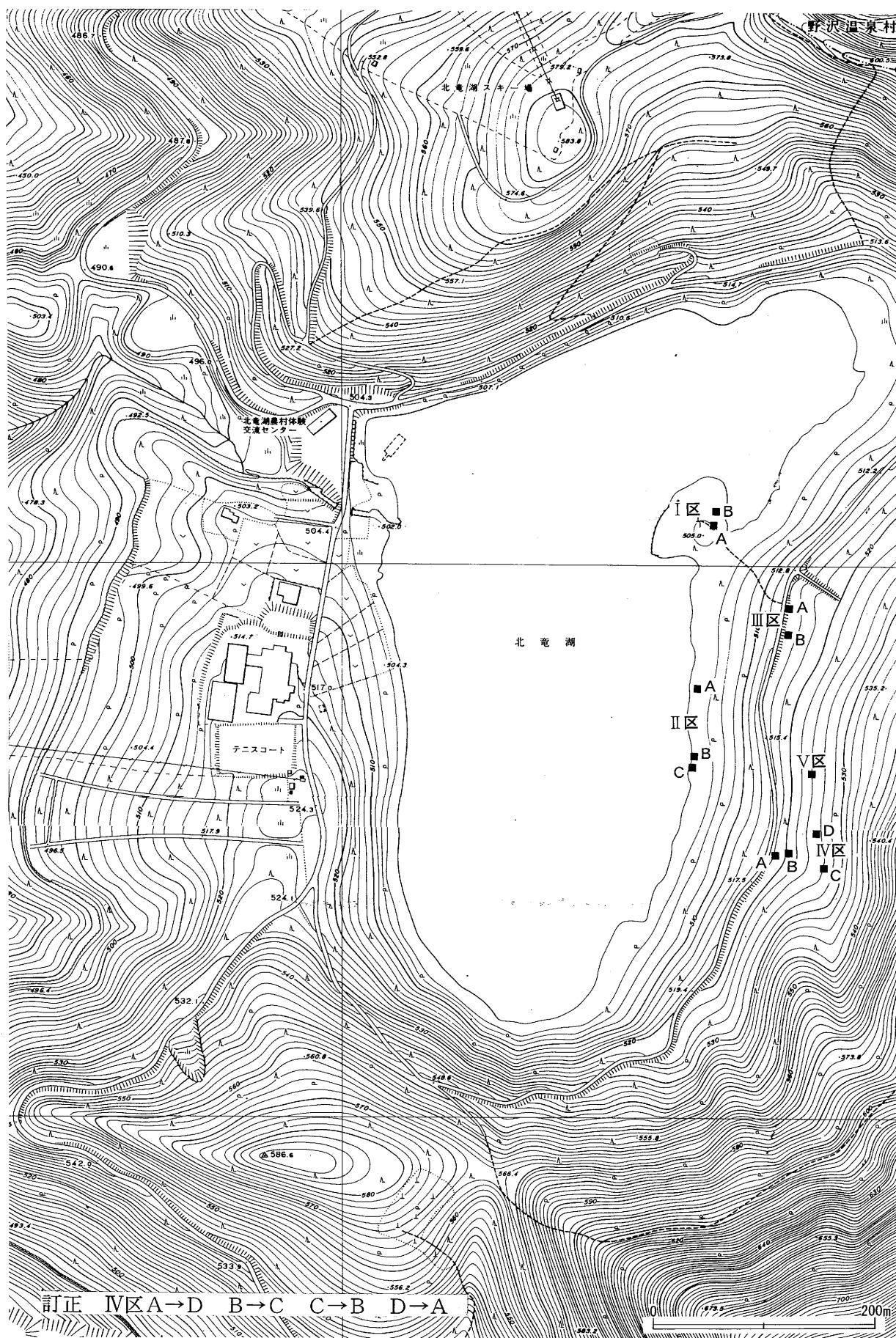


図8 大菅遺跡調査地点 (1:5000)



写真2 大菅遺跡遠景

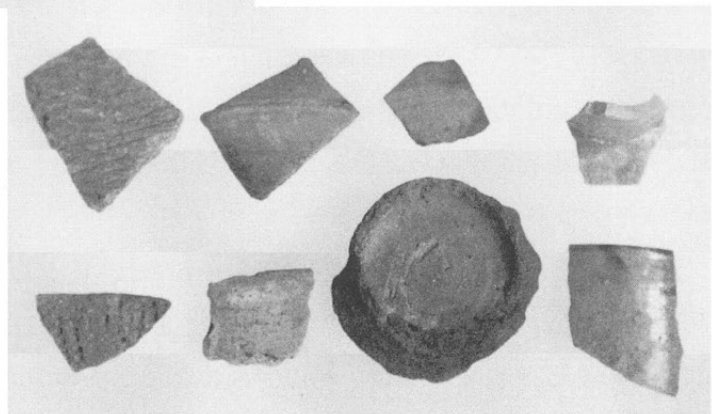
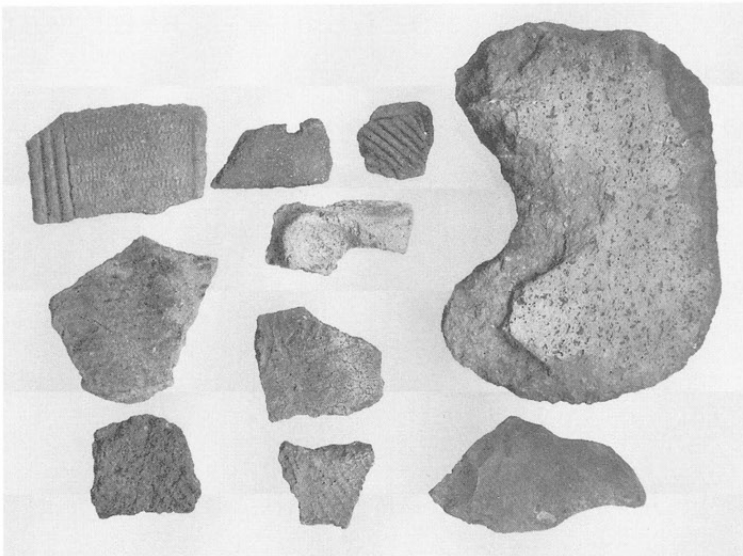


写真3 北竜湖・大菅遺跡採集遺物（2001年調査時）

2 各調査区の状況

(1) I 区

北竜湖の弁天島で、この場所は古くから石鏃や縄文式土器、弥生式土器が採集されており、飯山市遺跡分布図でも北竜湖遺跡F地点として登録されている場所でもある。ただし、弁天島の大半は池拡張や整備により削土され、保存されている部分は極僅かと思われる。そのため、大菅村の確認とともに北竜湖遺跡F地点の状況についても確認することとして選定した。

1) Aトレンチ (図9)

比較的形状が変更されていない部分で、2×4mのトレンチを設定した。黒色土が約20cmで、その下位は褐色の風化テフラ層である。テフラ層上部には比較的扁平な礫がやや多く産出する。調査区南側で、108×56cmを測る楕円形の土坑状の落ち込みを確認した。覆土は黒色土で、攪乱されたような形跡は伺えなかったが、出土遺物はなく人為的な遺構であるかどうかも明確にしえなかった。

本トレンチからの出土遺物はない。

2) Bトレンチ (図9)

弁天島の林内北側の平坦地で、満水期には水面下となる地点である。かつてはこの付近から北竜湖北岸までほぼ続いていたが、近年の弁天島改修の際に削土されたい。本トレンチは、この削土された部分に接する地点で、6×2mの調査区を設定した。

調査区の南側は5～10cmで褐色土層となり、すでに削土された場所であることが分かった。北側部分は、黒色土中に大きな礫が集中しており、褐色土層も急激に北側に落ちていく状況となっている。この傾斜は自然的なものと考えられる。大きな礫に接してピットが一基検出された。遺物は、北側黒色土中より縄文式土器片、弥生式土器片が礫とともに出土している。弥生式土器片は、後期箱清水式土器甕で、櫛描波状文が施文されたものである(写真4)。

(2) II 区

弁天島の南約200mの付近で、北竜湖は農業用溜池のため8月以降の渇水期にならないと湖上に現れない。したがって、所有者は湖の所有者の小菅区である。渇水期の湖岸は堤を築く前の湖水線とほぼ同じと考えられ、石垣は湖に接するところまで築かれている。ただし、波により崩れている個所が多い。この地区は植林もされていなく、また、埋没以降手をつけられることがなかったため、最も保存状況が良いと考え3本のトレンチを設定した。

1) Aトレンチ (図10)

湖面に接する部分で、石積みに区画された範囲は、南北約15m、東西約8mの狭長な一区画である。石積みに接した部分に8×1mのトレンチを設定した。石積みは、湖水の波により崩れておりほとんど原形をとどめていない。地山面のIV層までは約70cmを測るが、多量の礫がII層以下に含まれる。

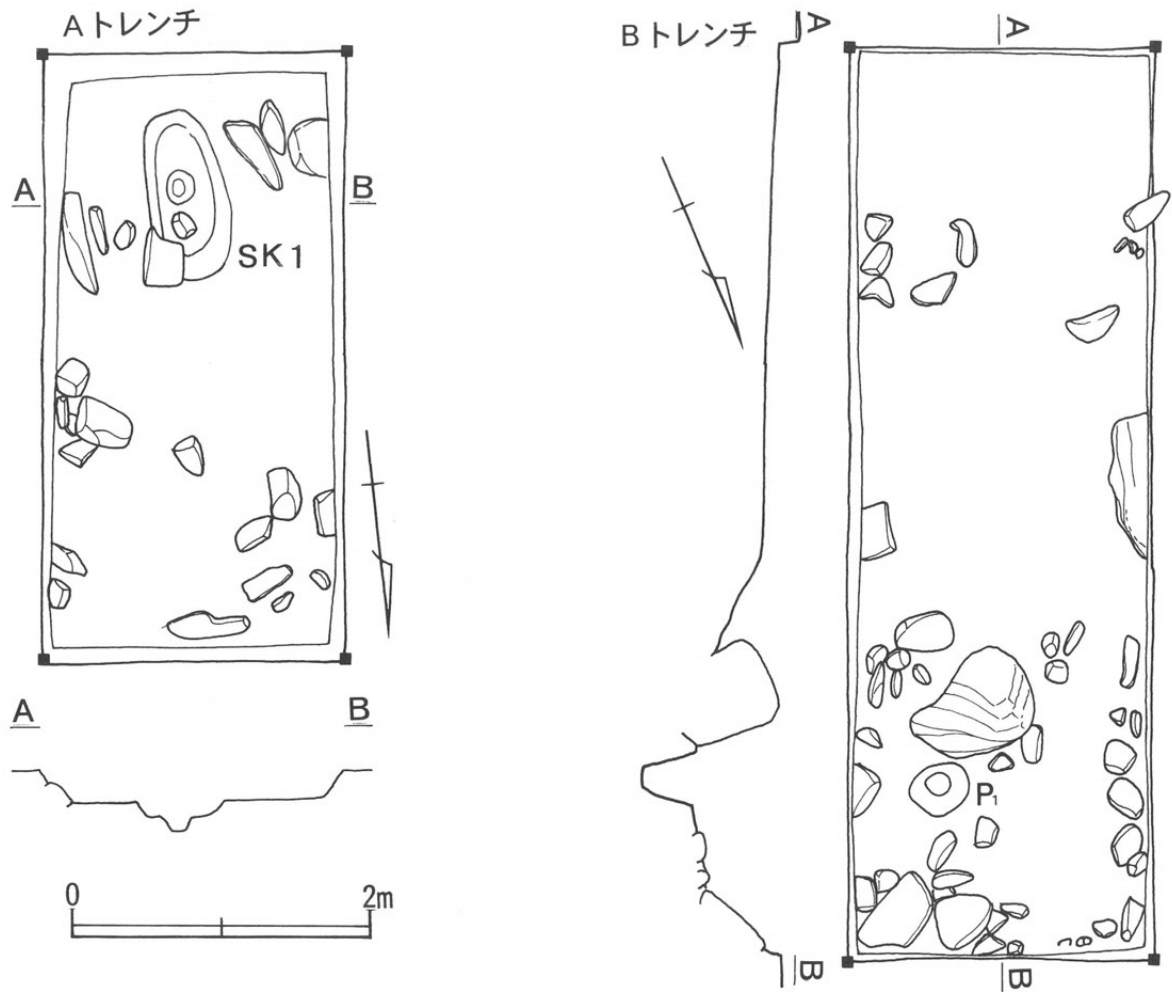


図9 I区A・Bトレンチ平面図 (1:50)

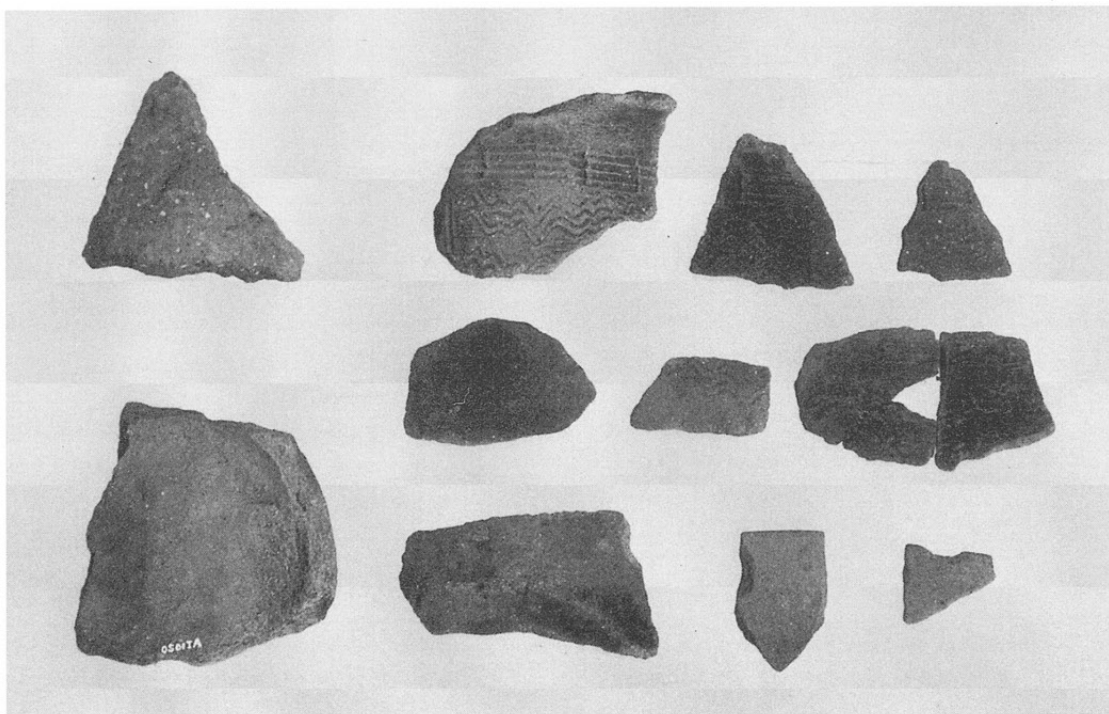


写真4 I区Bトレンチ出土遺物

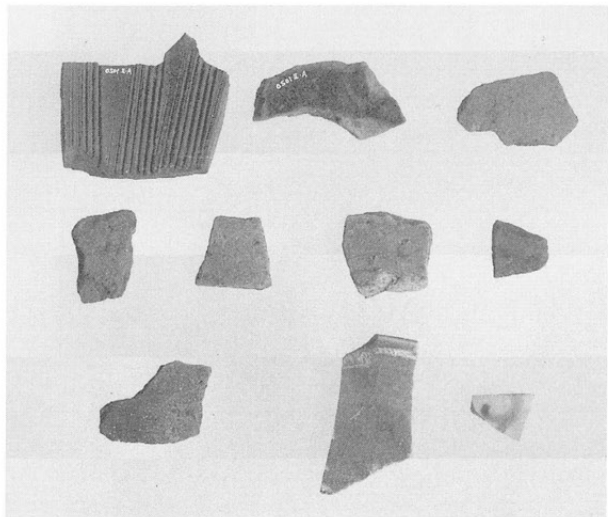
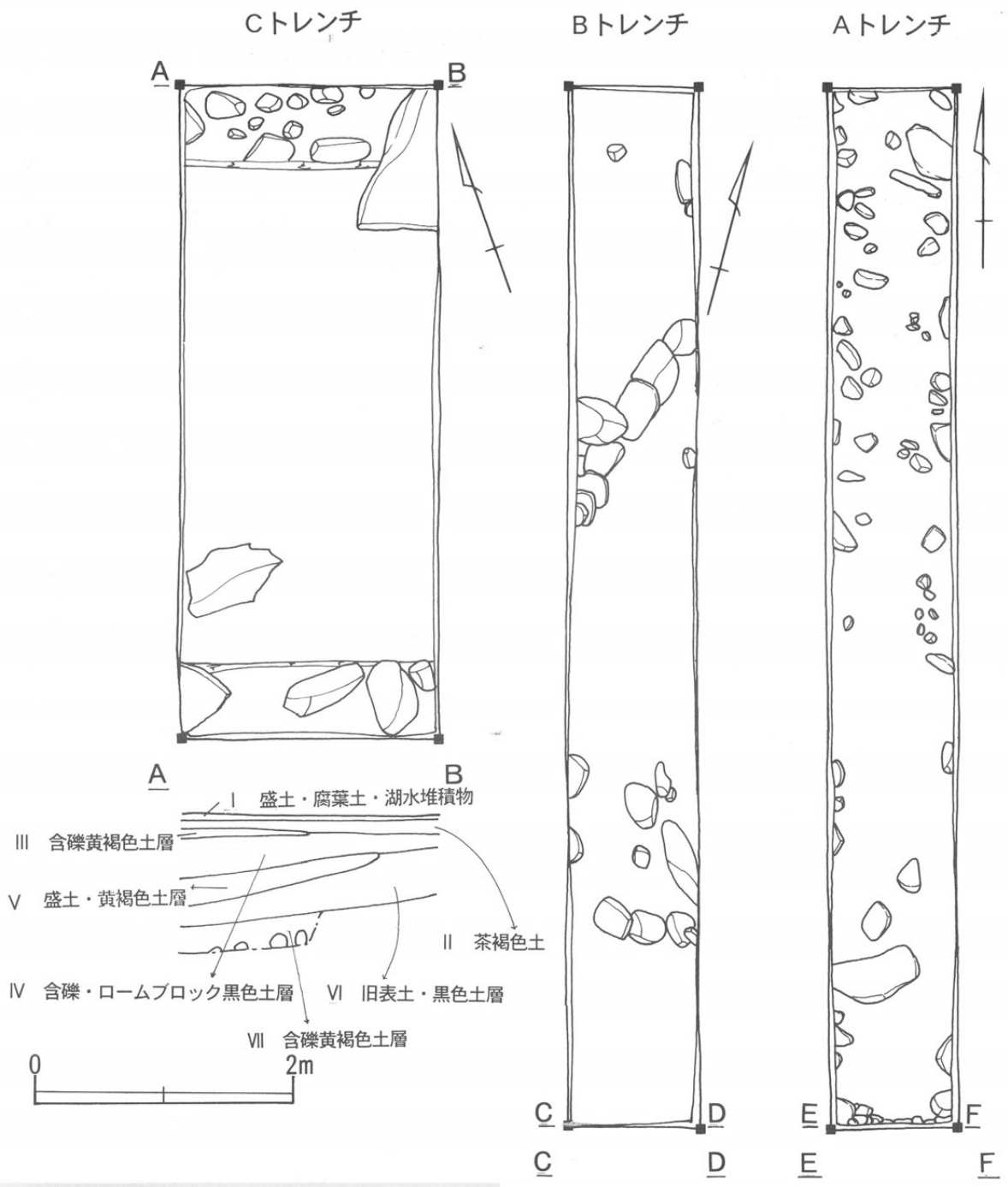


写真5 II区出土遺物

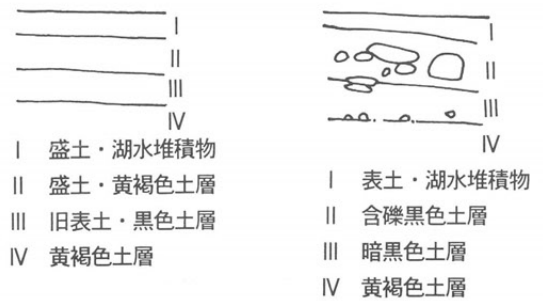


図10 II区A~Cトレンチ平面図 (1:50)

遺物は、内面黒色の土師器細片及び陶器挿鉢片（産地不明）がⅡ層において僅かに出土した（写真5）ことから、平安時代から中世における痕跡が微かではあるが認めることができた。

2) Bトレンチ（図10）

Aトレンチよりさらに南側のやや湖岸にせり出した地区に、8×1mのトレンチを設定した。土層状況から、湖に向かって傾斜している部分に土砂を盛土して平坦な区域を造成したと思われる。Ⅱ層以下に多くの礫が検出されたが、Ⅳ層にはそれほど多くの礫は含まれない。なお、旧表土のⅢ層下位から礫を並べたような痕跡を確認したが、明確な遺構とは断定できなかった。

本トレンチから遺物は出土しなかった。

3) Cトレンチ（図10）

Bトレンチの南側に接して5×2mのトレンチを設定した。Bトレンチ同様に湖面に向かって傾斜していく部分に盛土して平坦にしている。石積みは、上・下端が崩れているものの約1.2mの立派な石積みで、この部分については積み石状態も調査した（図15）。石積みは、旧表土から石積み一段分を地山面に掘り込み、その上に裏込めの小礫を充填させる。さらに上部にはやや大きめの石をその後ろに置いている。前面は崩れているために根石等については確認できなかった。

本トレンチからは、青磁片及び染付け細片が出土している（写真5）。

(3) Ⅲ区

弁天島へ下る道路の東側である。所有者等から一帯が「さぐざえむ屋敷」といわれている場所であるとの教示をいただいたため、屋敷伝承が残っている地点と考え調査のトレンチを設定した。昭和30年代まで畑として利用されていたらしいが、その後杉が植林され、現在では鬱蒼と生茂っている。

1) Aトレンチ（図11）

弁天島に降りていく市道に接した部分に6×1.5m及び3×1mのトレンチを足して変形のトレンチを設定した。地山面まで平均70cmで、すべて耕作された痕跡を示していた。礫も地山面に入り込んでいるもの以外すべて取り除かれており、畑開墾によるものと考えられた。

遺構は1箇所においてピットが検出されたが、時期等についてははっきりしない。

遺物も検出されなかった。

2) Bトレンチ（図12）

Aトレンチの南側に12×1mのトレンチを、斜面に沿って設定した。Aトレンチと同一区画ではあるが、地山面まで15～30cmであり、礫も多く含まれていた。黒色土の薄さと地山面における礫の多さから深く開墾できなかったようにも見受けられる。特にほぼ中央の大石は、表面にも僅かに顔を出していたが、地山面内に深く入り込んでおり開墾時にも取り除くのは不可能であったのだろう。したがって、むしろ開墾前の痕跡をとどめている可能性もあったが、遺構をはじめ遺物を検出することはできなかった。

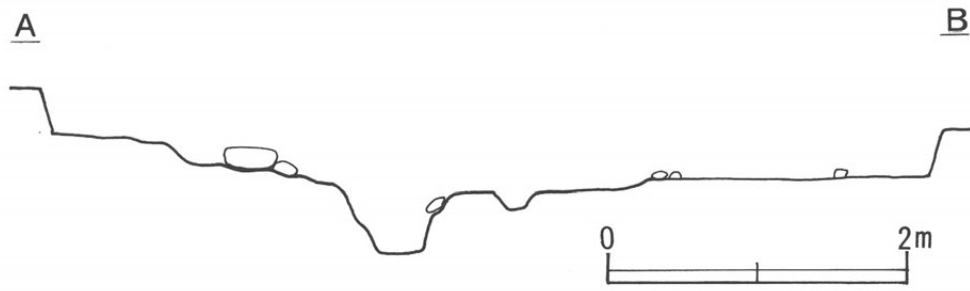


図 11 Ⅲ区Aトレンチ平面図 (1:50)



写真 6 Ⅱ区調査風景

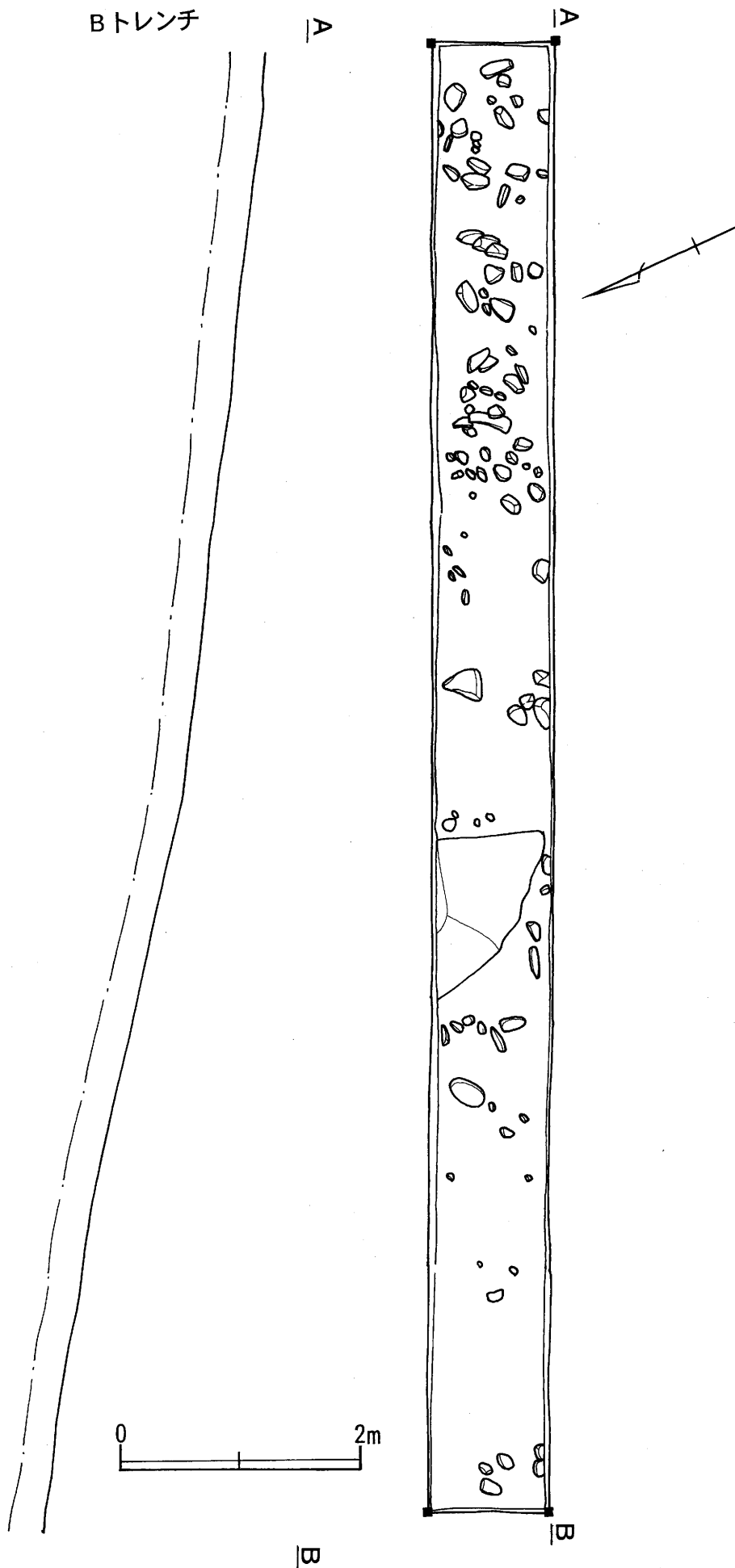


図 12 Ⅲ区Bトレンチ平面図 (1:50)

(4) IV区

大菅地区の南側の上方（東）で、旧字は「清水」と呼称されている場所である。森山氏の「小菅神社誌」の中で字清水より古鋤が採集されたとの記載があるため、調査区を設けることとした。この上方には、字名の基となった湧水が認められており、近代初期頃からは一部に水田も作られていたらしい。4箇所を設定した。

1) Aトレンチ (図13)

今回の調査区では最も上方となる。これより上位は国有地となり字大菅の区域外となるらしい。昭和30年代頃まで水田として利用されていたらしく、現在も杉の植林はなく水田跡とわかる場所である。すぐ脇を湧水の水路が通っている。

トレンチは、5×1mを設定した。斜面を均して平坦にしており、斜面上部を削土して、下側に盛土した状況がセクションに現れている。V層の地山面にも礫は含まれるが、トレンチ内には1m以上もの大石が床土直下に入っている。これは、造成時に現れた大石を盛土する地区まで移動させて埋め戻したものである。

遺物は、土師器細片2点が出土しており、そのうち1点は内面が黒色された坏と思われるので平安時代の土器だと考えられる（写真7）。

2) Bトレンチ (図13)

Aトレンチの南側の急斜に変換する直前の僅かな平坦地に、7×1mのトレンチを設定した。旧畑地と思われる。ほとんど礫が含まれなく、土層も上部から分離できないことから地山面まで開墾されたものと判断した。

出土遺物はない。

3) Cトレンチ (図13)

A・Bの西側の下斜面で、6×1mのトレンチを設定した。約40cmで地山の黄褐色土層となるが、II層の黒色土層にも多くの礫が含まれており、耕作された部分は約25cmである。

遺構および遺物は検出されなかった。

4) Dトレンチ (図13)

IV区の最も低い地区であり、市道に接した部分に4×1mのトレンチを設定した。Cトレンチ同様に、II・III層に礫が多く含まれる。

遺物は2点出土し（写真7）、土師器黒色土器坏および甕であり平安時代に比定される。

(5) V区 (図15)

周辺は別荘地として一時売り出された地区であり、多くが市外の方の所有地となっており、地元小菅地区住民の所有地を選定してトレンチを入れた。「小菅神社誌」に大菅の大石より古刀が出土したとの記載があり、地区内には多くの巨石があるものの本地区にも存在することから調査することとした。

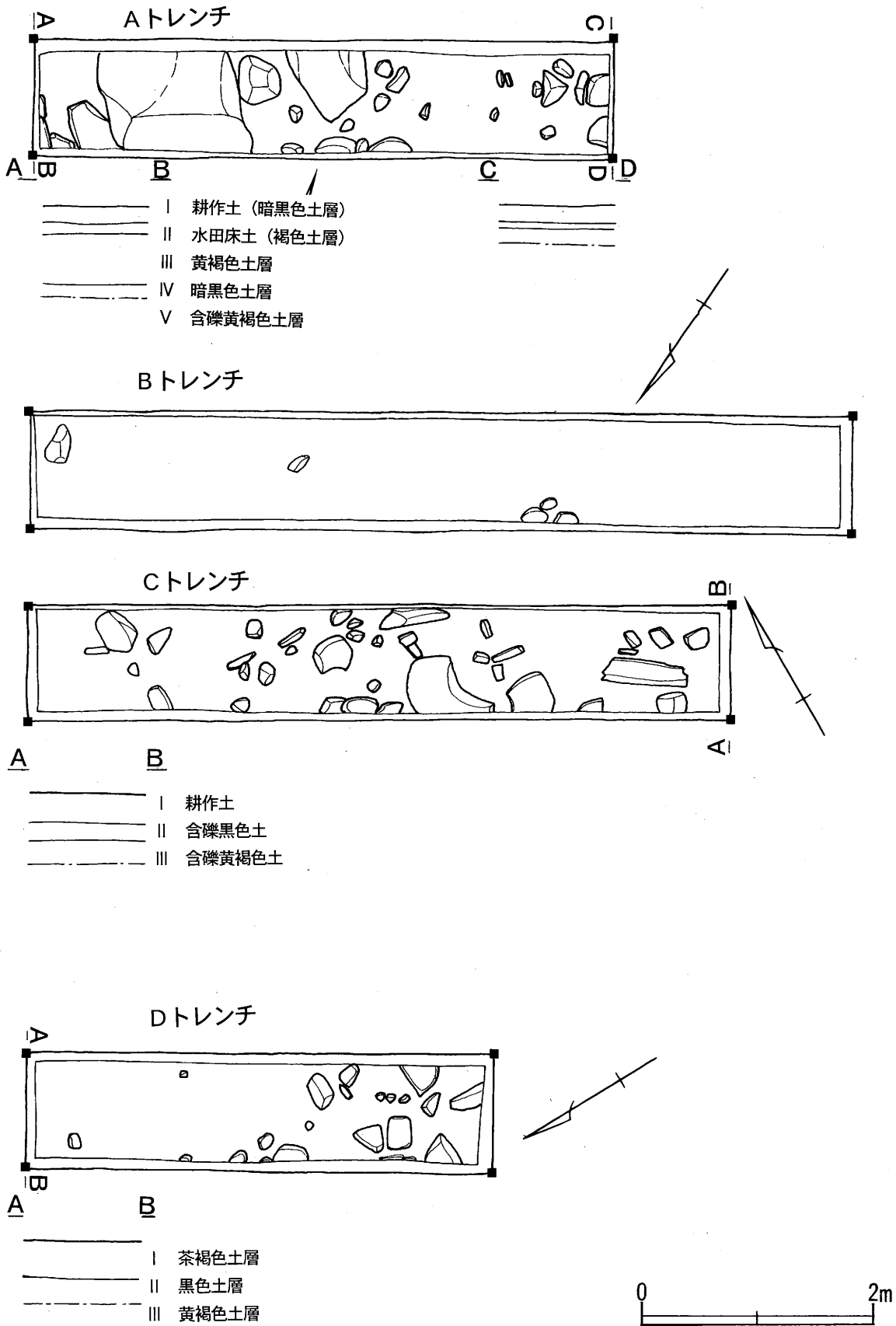


図13 IV区A~Dトレンチ平面図 (1:50)

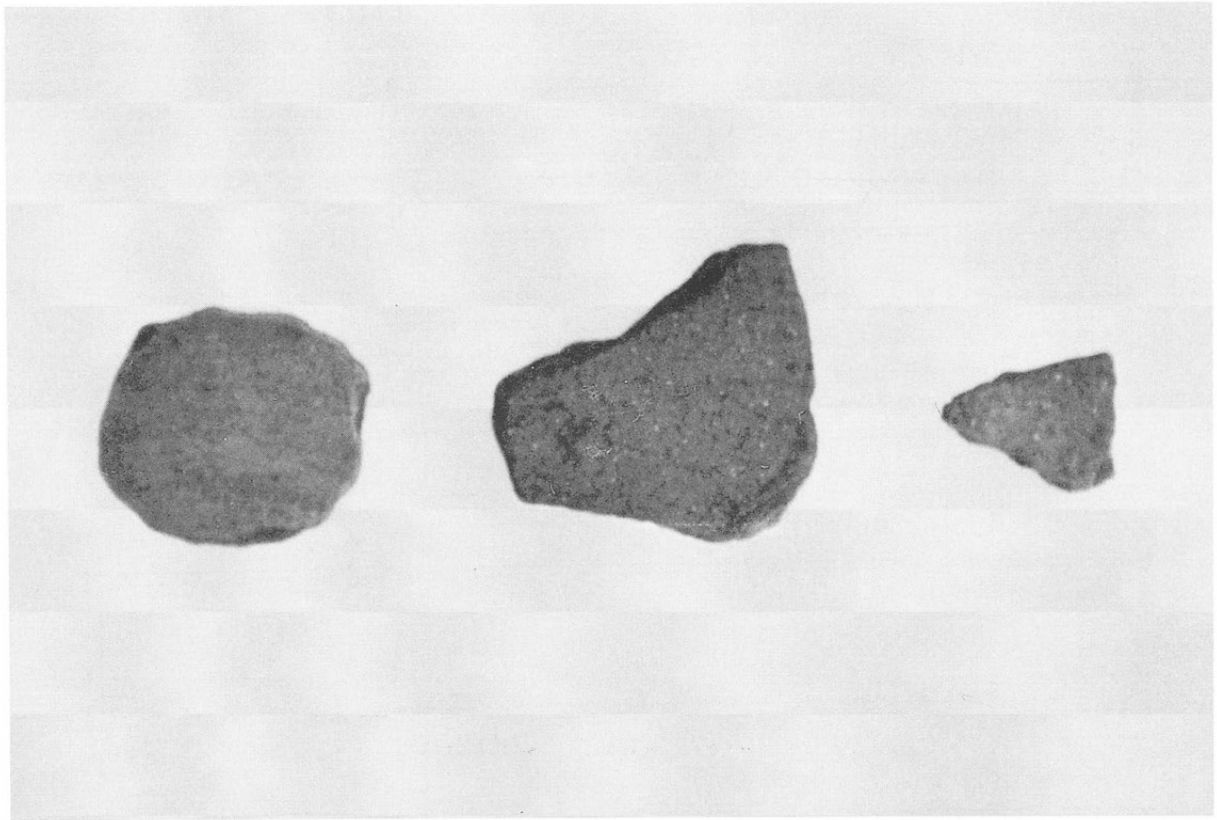


写真7 IV区A・Dトレンチ出土遺物



写真8 IV区調査地区近景

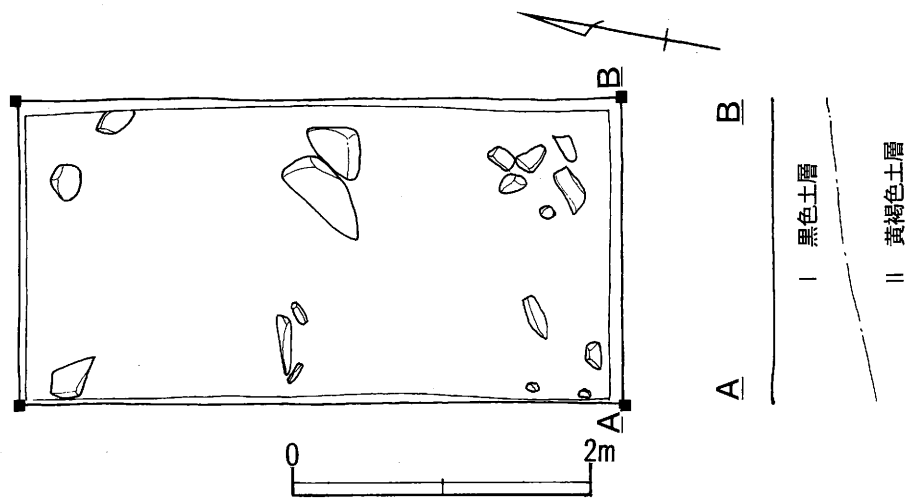


図14 V区トレンチ平面図 (1:50)

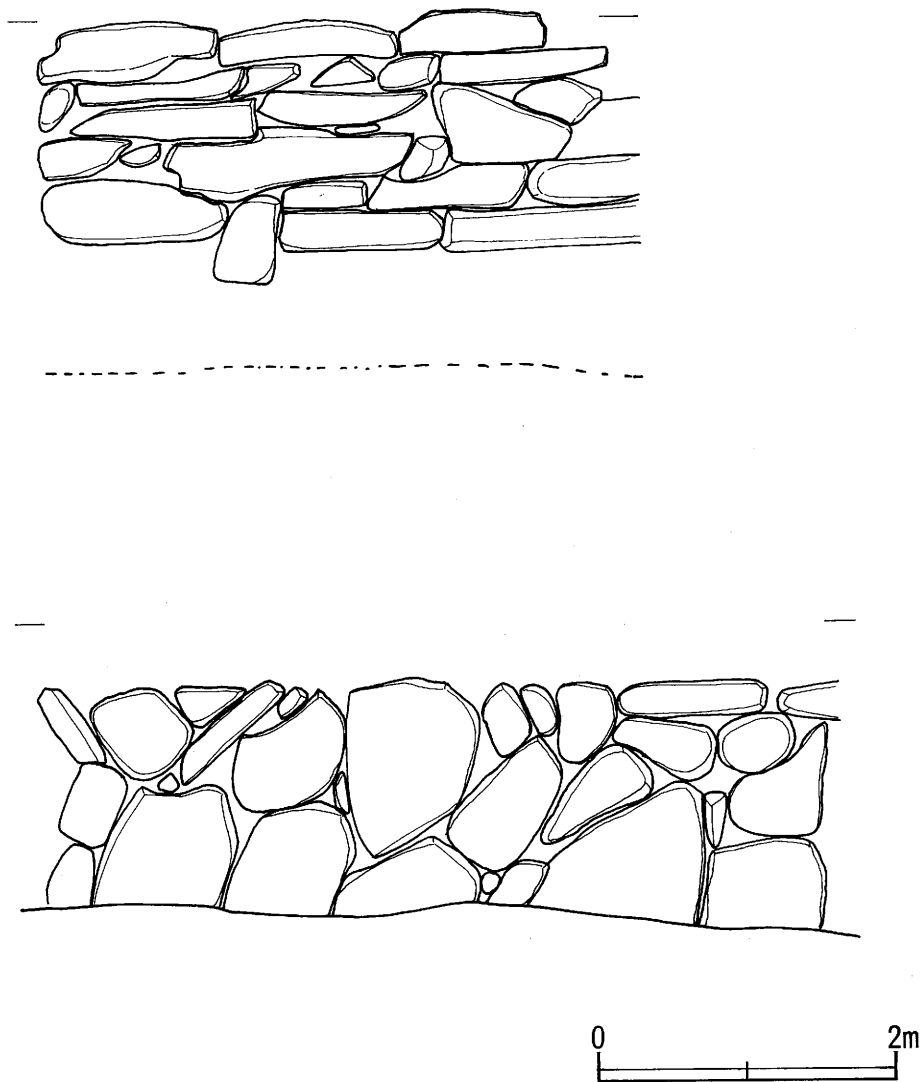


図15 石積みのA・Bタイプ

トレンチは、4×2mの1本のみである。地山面まで開墾されており、遺構や遺物は検出できなかった。

(6) 石積みについて

平成13年10月24日に行われた調査会議において、調査指導者より石積み方法について調査するよう指導を受けた。時間的な制約もあったが、今後の検討課題とするためⅡ区において調査を実施した。

石積みの表面的な形態は、平石を横に積み上げていくAタイプと縦に積み上げるBタイプの2通り存在する事がわかった。地域全体を検証したのではないため、他にも異なったタイプが存在するかもしれないが、現時点では1m以上に積み上げる場合はAタイプ、50cm程度の場合はBタイプを採用するようである。これについては、今後時間的な差はあるのかどうかも含めて大菅地区全体を調査したい。

工法については、Ⅱ区Cトレンチを利用して図示したAの石積みを裏側から調査した。それによれば、石積みは旧表土を約20cm掘り下げて一番下の石を据付け、後に裏込め石を入れながら徐々に積み上げていく方法であった。斜面の土地を削土・埋土してほぼ平坦となった段階で、その端部に石を積み上げる方法である。

これについても、今後全域で調査を実施することとしたい。



写真9 タイプA石積み



写真10 タイプB石積み

IV 小菅大聖院跡確認調査の概要

1 調査区

大聖院は、昭和30年代後半まで建物が存在しており、跡地も明確に残されていた(図16・17)。現在は付属建物の護摩堂や池のみが残されている。跡地は、約四分の三を当時の大聖院所有者の武内氏から小菅神社氏子総代会が買い上げ、杉を植栽した。その一角に昭和50年に氏子総代会により「大聖院跡」碑が建てられている。ただし、林内は近年の里山と同様に手入れがされておらず、枯れ枝などが散乱しており、当時の面影は失われていた。そのため、調査にあたってまず林内の片付け作業から開始することとし、その後全体をカバーできるグリットの設定を行うこととした。

グリットの設定は、跡地に沿うよう任意に設定した。

2 調査

今回の調査は、解体された大聖院建物がどのような規模をもっていたか、また時期的にどこまでさかのぼることができるか考古学的調査により明らかにすることであった。加えて、明らかにされた大聖院跡をどのように後世に残していくべきか考えていく資料としたいことも目的としてあった。

(1) 大聖院跡の規模(図18)

林内の清掃により解体当時の礎石が多く残されていることが明らかとなった。一部においては、畑開墾および記念碑建立に伴って撤去あるいは転用されていたため、残されていない箇所も存在したが概要を把握するには充分であった。また、地区の方より記憶されている範囲で教示もいただいたので、今後の研究でさらに明らかにされるものと思われる。ここでは、清掃により明らかにできた部分について記述していき、今後の検討材料としたい。

建物は間口17間、奥行き7間と伝えられてきたが、今回の調査でほぼそのとおりと確認できた。入口は正規の表玄関と通用口(西入口)並びに勝手口(南入口)とがある。正面玄関は、現在の記念碑付近にあったとされ、賓客来訪時のみに使用されたという。通用口は日常の玄関で、石の階段が3段認められる。中に入ると広い土間があったという。また、入口右側には馬小屋が2部屋あったらしい。勝手口は南側にあったといい、階段状に配石が認められたので、位置はほぼ断定できた。茶の間・座敷等については、地区の方の記憶もまちまちであるが、表玄関より北側が座敷となっていたことはほぼ一致している。護摩堂へは7尺の畳廊下より繋がっていたとされる。また、茶の間等については、板の間および畳の部屋が計3部屋あったらしいので、表玄関と通用口の間がそれにあたるので、今後礎石をもう少し検討していけば間取りも明らかにできると考えられる。

今回の調査では、礎石の全部を検出したのではないので細かな検討を加えられないが、今後すべての礎石を明らかにして検討していきたい。

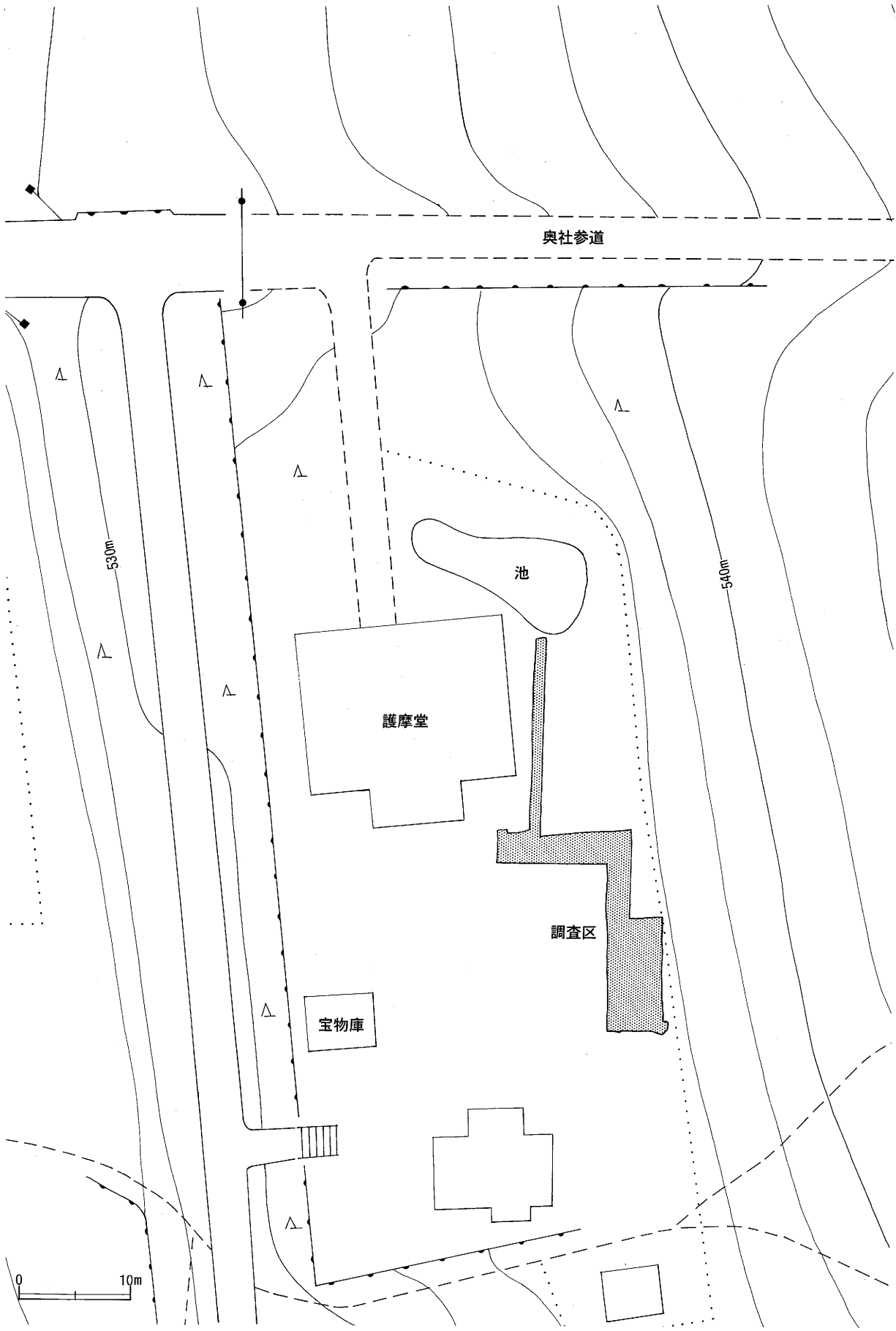


图 17 大聖院跡地地形図 (1 : 500)

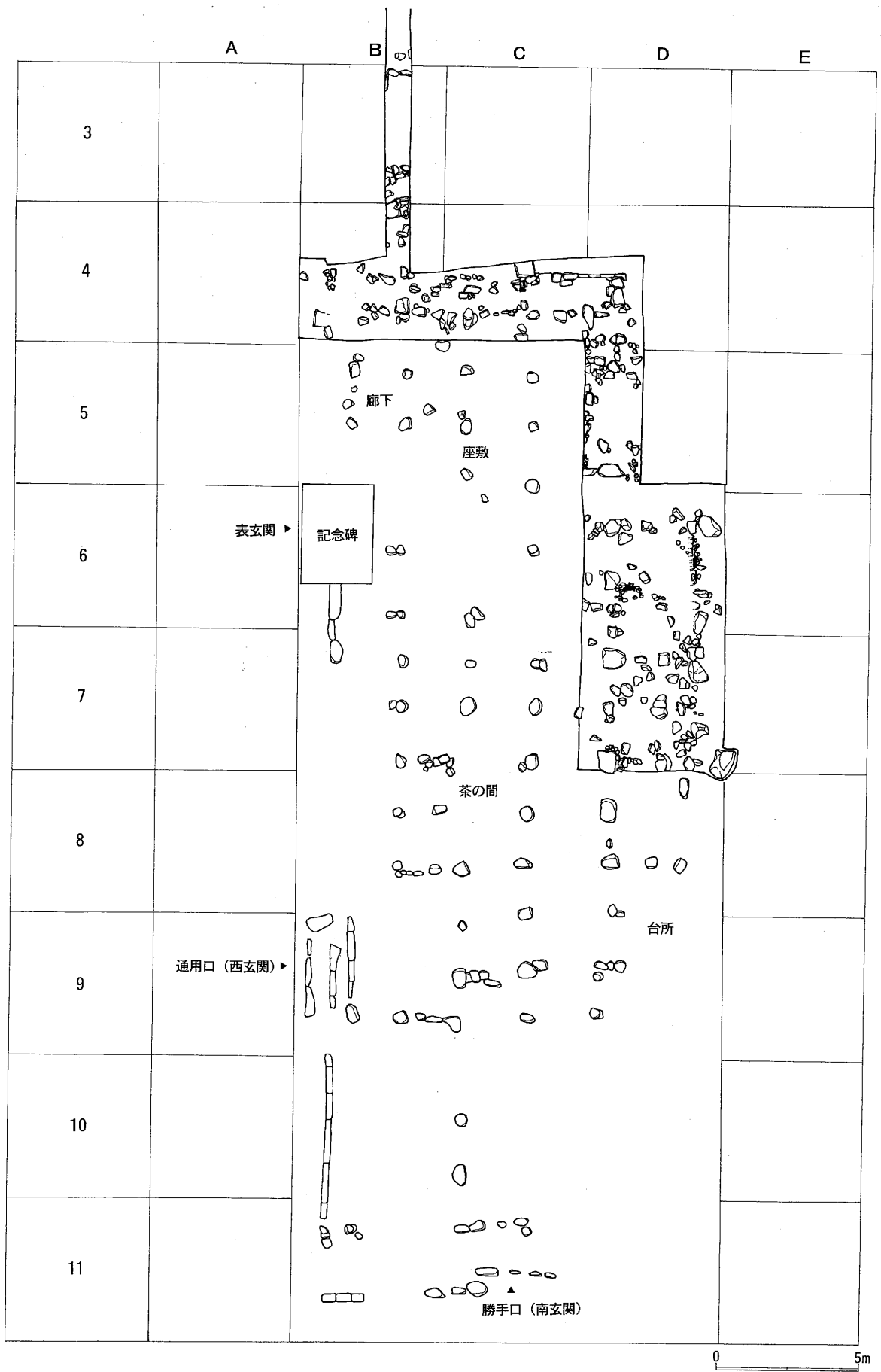


図 18 グリット設定図及び礎石略測図 (1:200)

(2) 発掘調査

地下の状況を把握するために、大聖院建物の北および東側を主体として調査した。また、護摩堂建物東側の池に続く個所についてもトレンチを入れ、調査した。

建物北側部分においては、北東隅において縁石と思われる切石の列を検出している。検出状態からはさらに東側に続くとは考えられないが、建物奥行き規模および東側の礎石検出状況から考える限り延びる可能性があり、今後さらに東側を調査する必要がある。

建物の奥にあたる東側の調査では、縁石については一部の確認にとどまったが、礎石列を確認した。

遺物は、清掃時において多く検出している。発掘個所においては、D-6で磁器埋納ピットを検出し、計8枚の皿・碗が納められていた。この埋納ピットの意味については現在のところ不明といわざるを得ない。また、同じくD-6西南隅において甕が正位に置かれた状態で出土した。液体等が入っていた形跡は認められなかったが、状況から床下に置かれたものと考えられる。また、台所があったと推定されるD-8・9区から多量の食器類が出土している。これらの多くは、近世～近現代のものである。唯一中世にさかのぼる遺物として、C-4区杉の根の間から出土した珠洲陶器甕破片がある。C-6区でも珠洲陶器を採集しており、中世にさかのぼる資料も得られた。



写真11 大聖院跡（整備前）



写真12 回廊式池



写真13 D-6 磁器埋納坑



写真14 発掘調査地近景

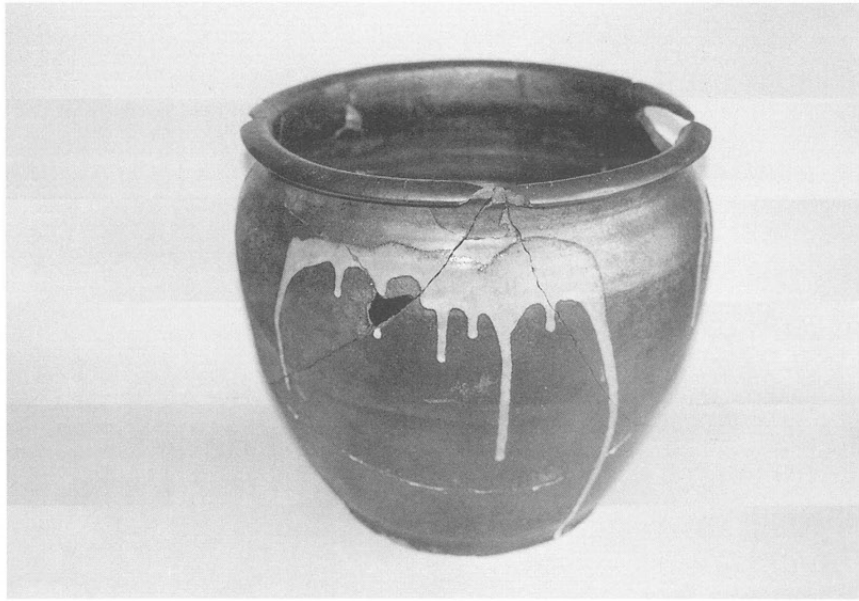


写真 15 甕 (昭和前期)



写真 16 甕 (幕末～明治)



写真 17 甕 (幕末～明治)



写真 18 D-6区磁器埋納抗出土磁器（明治～大正）



写真 19 飯碗（近世後期～明治）



写真 20 湯呑碗（幕末～昭和）



写真21 皿（近世後期～明治）

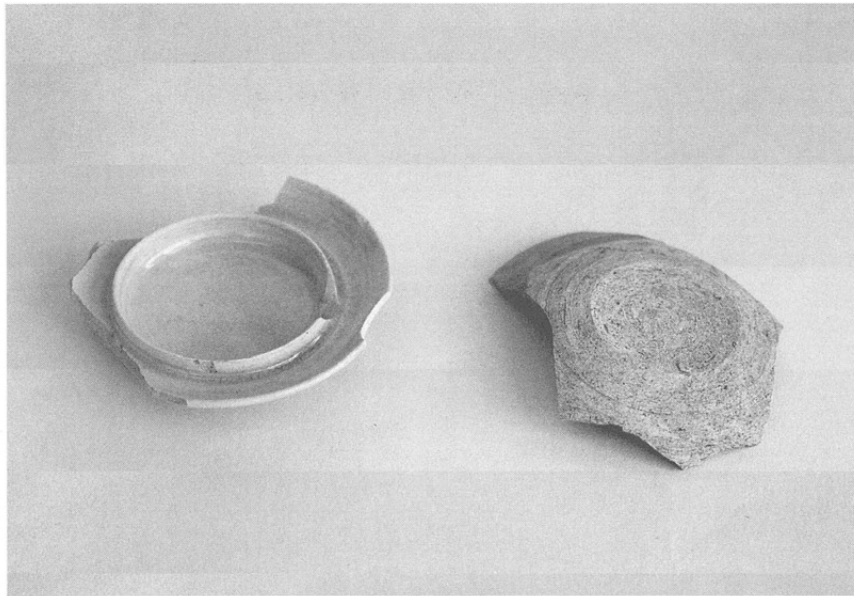


写真22 灯明皿（近世）



写真23 德利・仏神具（近世後期～昭和）

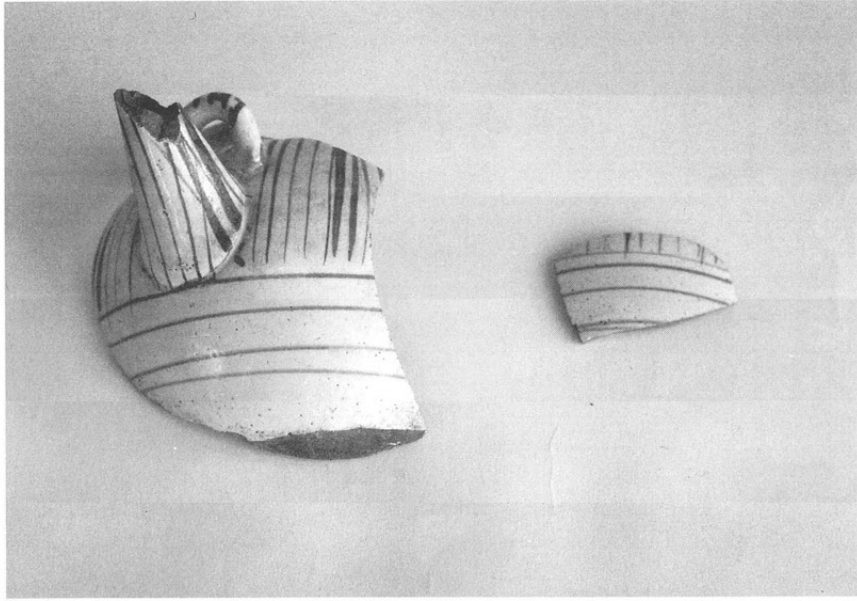


写真24 急須（大正～昭和前期）

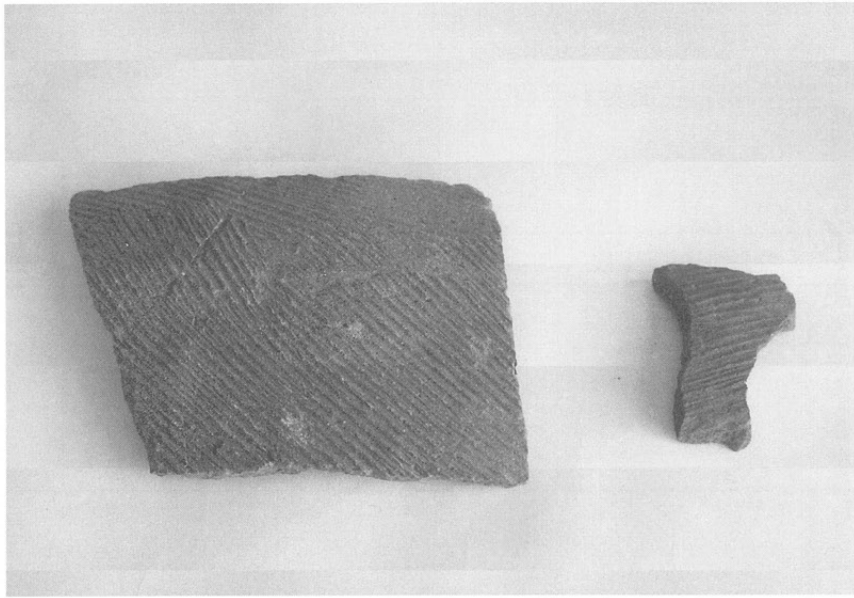


写真25 珠洲陶器甕（中世）



写真26 鉄製品（釘・火箸・金槌・鋤など）（大正～昭和）

報告書抄録

ふりがな	おおすげいせき・こすげだいしょういんあと いち							
書名	大菅遺跡・小菅大聖院跡Ⅰ							
副書名								
巻次								
シリーズ名	飯山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第66集							
編著者名	望月静雄							
編集機関	飯山市教育委員会							
所在地	〒389-2292 長野県飯山市飯山1110-1 電話0269(62)3111 内線363							
発行年月日	平成14年3月22日							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおすげ 大菅	7407-イ・ロほか	20213		36° 54' 06"	138° 25' 48"	20011001 ～ 20011102	100 m ²	確認調査
				36° 53' 28"	138° 25' 52"	20011106 ～ 20011119		
だいしょういん 大聖院	7053						116 m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大菅遺跡	村落?畑跡	平安～中世 近世	石積	黒色土器 青磁片				
小菅大聖院跡	寺院	中世～現代	建物跡	陶磁器・鉄製品				

飯山市埋蔵文化財報告 第66集

大菅遺跡・小菅大聖院跡Ⅰ

平成14年3月22日 発行

編集 飯山市教育委員会
飯山市大字飯山1110-1

発行 飯山市教育委員会
学校法人文化学園
修験の里小菅史跡調査委員会

印刷所 (有)足立印刷所

